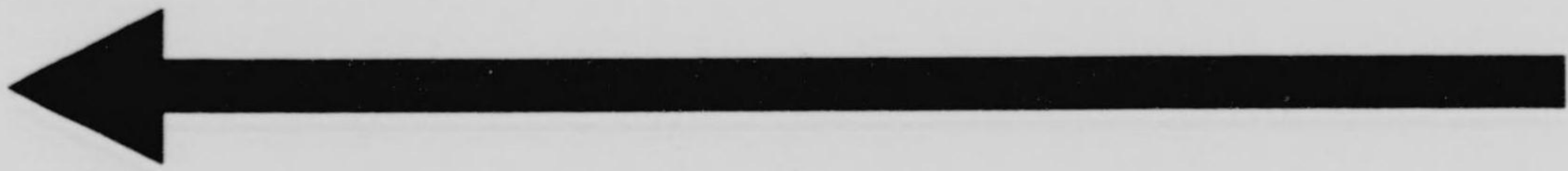


370
15



始



370-15



書訣

日下部鳴鶴翁述

大正
6. 12. 18
内交

眞寫の筆執腕廻生先鶴鳴部下日



緒言

- 一 本書は日下部鳴鶴氏が、編者の問に答へられたる、北派書道に關する口述の筆記なり。
- 二 本書記述の體裁は、要訣と布演との二部に別ち欄内の上部より書き下したるは要訣にして、一字低きは布演なり。
- 三 要訣は固より、布演も亦た鳴鶴氏の口述を基礎としたること言ふ迄もなけれども、布演には往々編者の意を加へたる所もあれば、其の責を明かならしめんが爲め、斯る體裁を取れり。

- 二
- 四 要訣、布演ともに筆記の責は全く編者にあり。
 - 五 (考)には、本文の説明上、参考となるべきもの、及び書人の必らず知らざるべからざる古來の書論を掲載せり、是れ全く編者の意に出づ。
 - 六 本書に於ける記述の前後、篇章の區別等、編纂に關する責任は、總て編者に在り。
 - 七 本文中に挿入せる代表的碑帖類は、概ね鳴鶴氏の指定に據る。
 - 八 本文中、楊守敬の語は、「學書邇言」に據るもの多し、特に之を明記す。

大正六年十二月

編者 秋旻

書訣目次

書法第一

- 一 學書三要……………四
- 二 執筆定法あり……………八
- 三 雙鉤廻腕……………九
- 四 撥鐙法の價值……………二
- 五 把筆の高下……………六
- 六 執筆法の異同……………七
- 七 腕法の能否……………九
- 八 藏鋒渾厚……………三
- 九 落筆痛快……………四

十	筆力紙背に徹す……………	四三
十一	用筆は口訣に由る……………	四五
十二	書法は唯縦横あるのみ……………	四八
十三	行畫、曲を用ふ……………	五五
十四	正鋒と側鋒……………	五八
十五	用筆の實例と結字……………	六六
十六	碑版を學べ……………	九一
十七	名家の劇蹟を参照せよ……………	九五
十八	方筆と圓筆……………	一〇〇
十九	手本を選ぶの標準……………	一〇四
二十	多見多寫……………	一一一
二十一	臨帖の要事……………	一一九
二十二	進で其の所以を學べ……………	一三〇

二十三	性情流露と一家の書風……………	一四六
二十四	斯道の妙域に達する奥義……………	一五四

書史第二

一	三代—古摺文……………	一六三
	鐘鼎彝器の銘……………	一六七
	石鼓の殘字……………	一八〇
二	秦—篆……………	一八六
	秦碑……………	一八六
	權量、詔版、瓦鐃……………	一八九
三	漢—隸……………	一九三
	前漢の古隸……………	一九四
	流沙發掘の木簡書……………	一九六

後漢初期の書體	二〇九
八分の妙境	二一九
四 三國—隸、楷	二二三
五 南北朝—楷、行、草	二二九
晋代の名蹟	二三〇
六朝の楷法	二六八
北魏の盛觀	二七四
隋楷の整齊	二九三
六 唐—篆、隸、楷、行、草	二九五
唐朝の楷法	二九七
唐朝の行草	三一九
唐朝の篆隸	三三九
五代の風氣	三三二

七 宋—楷、行、草	三三六
宋の四大家	三三六
八 元、明、清の諸家	三四五
元の書人	三四五
明の書人	三四八
清の書人	三四九

書鑑第三 (本文中に挿入せる代表的碑帖類)

一 克鼎—三代	三八
二 石鼓殘字—同上	三八
三 瑯琊臺碑—秦	三六
四 瓦鐫文—同上	三八
五 五鳳碑—前漢	四八

六	木簡書——同上……	五
七	同上……	六
八	孔廟禮器碑——後漢……	七
九	西狹頌——同上……	八
十	楊淮表記——同上……	九
十一	石經殘字——同上……	一〇
十二	天發神讖碑——三國……	一一
十三	饜龍顏碑——晉……	一二
十四	黃庭經——晉、王羲之書……	一三
十五	蘭亭叙——同上……	一四
十六	聖教序——同上……	一五
十七	尺牘二——同上……	一六
十八	瘞鶴銘——梁……	一八

十九	雲峰山——北魏、鄭道昭書……	一九
二十	鄭文公碑——同上……	二〇
二十一	龍門造像(北海王元祥)——北魏……	二一
二十二	張猛龍碑——北魏……	二二
二十三	菩薩處胎經——西魏……	二三
二十四	楷草千字文——陳、智永書……	二四
二十五	汝南公主墓誌——唐、虞世南書……	二五
二十六	醴泉銘——唐、歐陽詢書……	二六
二十七	孟法師碑銘——唐、褚遂良書……	二七
二十八	書譜——唐、孫過庭書……	二八
二十九	雲麾將軍碑——唐、李邕書……	二九
三十	朱環碑——唐、顏真卿書……	三〇
三十一	爭坐位帖——同上……	三一

三十二 草書千字文—唐 懷素……………三六
 三十三 樂毅論—光明皇后……………三六

書訣



訣は必ず口授
 に由る

訣は、方術の要法にして、決定疑はざるを謂ふとあり、
 随つて意味は極めて深遠であるが、言辭は頗る簡短であ
 る例へば『老子』五千言は、道德の要訣、『孫子』十三篇は、
 兵法の要訣たるが如く、『書訣』は、言ふまでもなく、書道
 の要訣である、されば一讀再讀、僅かに文義をば解し得
 ても、其の眞味に至つては、なかく、容易に會心し得ら
 るゝものではない。故に訣は必ず口授に由るとも云ひ、

漫りに初學の士に、これを授くる時は、却て害を及ぼす
ことになるのであるが、さりとて今日の如く、印刷術も
發達し、交通の機關も備つて居る世の中に、一々口授に
由らなければ、それを知ることが出来ないと言ふのも、
甚だ残念であるのみならず、自から不立文字と稱し、以
心傳心を以て、教への主義として居る禪にすら、『碧巖錄』
其の他の法語があつて、後進誘導の手引となり、又専ら
良知を致すを以て、學問の要となせる陽明學にも、『傳習
錄』其他『陽明全集』の如き、大部の編述もあり、書道豈に要
訣なからんやであるが、前にも云ふ通り、意味深遠にし
て、言辭は簡短であるから、これを列序するに、先づ初
學の士の、第一に心得べきことより、漸次に進んで、其

の蘊奥を究むることゝした、併しそれのみでは、尙ほ解
り兼ねることも多いから、嘗て編者の試みたる問を其の
まゝに存して、先づ研究者の心を開發し、答によつて鳴
鶴翁の要訣を示し、尙ほ解釋を要するものには、解釋を
施すことゝしたが、詰る所、書道研究者が、言辭の末に
拘泥せず、順序を誤らないやうに、自分の力相應な所を
學んで、實際の上に、これを會得することが、何よりも
肝腎である。

書法第一

一 學書三要

凡そ何事を學ぶにも、先づ其の綱領を得て、大要に通じ、然る後ち細目に及ばず、勞すること少なくし、功を收むること多く、殊に大要を理會して居る時は、方針を誤ることなく、初學の爲には、最も大切のこと、思はるゝが、書道研究に就て、終始心得て置くべき、大切なる個條は、如何なることなるべきか。

書を學ぶに三要あり、一に曰く天分、二に曰く多見多聞、三に曰く學問熟練、是れなり。

此の事は、『鳴鶴先生學書經歷談』にも出て居て、それによ

天分、多見多聞、學問熟練

ると、鳴鶴翁は、少年の時から、篤く書を好み、其の初め分り難きことも、種々工夫を重ね、必らず會得するに至らざれば已まぬ力を以て居られたと云ふことで、書を學ぶには、何より先づ此の天分が無くてはならぬ、而して又、其の人の腦、其人の眼、其の人の手等にも、それぞれ書學に上達するの天分がなくてはならぬ。斯くて又翁の語に、「去りながら、假令へ天分があつても、多く古人の書を見、多く先達の格言を聞かなければ、我が心の疑惑を啓き難く、これに加ふるに、十分の熱心を以て、數十年怠らず熟練して、始めて一家を成すに至る次第である」と記してある。昔者宋の歐陽修は、文章を學ぶに、三多の説あることを唱へた、それに由ると、「一に曰く、

熟練、一家を成す
歐陽修の三多説

多く名文を読むこと、二に曰く、多く自から作ること、三に曰く、多く推敲することと云ふのであるが、尙ほ楊守敬、梁同書等も、これと略ぼ同様のことを謂つて居る。

(考)

楊守敬曰く、梁山舟が答張芭堂書に謂ふ。書を學ぶに三つの要がある。天分第一、多見これに次ぎ、多寫またこれに次ぐと、此れは定論である。乃ち博く金石に通じ、終日臨池を事とし、而も筆跡の鈍穢なものがあるのは、天分に限られて居るのである。また嘗て筆を下すこと敏捷に、而も一家を墨守して、終に變化に乏しいものがあるのは、則ち見ることの少い弊である。また嘗て古人を臨摹し、動もすれば規矩に合し、而も自から一家を爲す

能はざるものがあるのは、學力の疎なる爲めである。而して余はまたこれに加ふるに二要を以てする、一は人品の高きを要する、品が高ければ、即ち筆を下すこと妍雅にして、塵俗に落ちない。一は學富を要する、胸に萬有を羅するときは、書卷の氣が、自然に行間に溢れる。古の大家に、此れを備へないものはない、未だ胸に點墨なくして、能く等倫に超軼するものは、斷じてない。

梁同書が、答陳蓮汀論書に曰く、書を學ぶの一道は、其の人の資地が第一であつて、勉學が其の次ぎである、資地が佳くなければ、學んでも益はない。足下は用筆の資があつて、而して又學を好み、問ひを勤めるから、進まない心配はないが、但だ臨池の時は、最も惇悛心の亂る



ることと、塗抹とを忌むから、神氣の向かない時には、筆を停めて、字を書かないが可い。字を學ぶには、總べて楷書を寫すことが、肝要である。そして又、愛看愛讀の書を、鈔寫するのを妙とする、蓋し斯くすることは、一舉兩得であるからである。

二 執筆定法あり

「執筆もと定法あるなく、其のこれあるは後代に始まる。宋人は意態を講じ、施して可ならざるなし、蘇東坡は、乃ち把筆あつて定法なし」と云ふことがある。支那のやうに、書を以て祿を干むるの資となし、或はこれを以て、日常筆寫の用に供せんとするが如きは暫らく措き、藝術の一として、趣味の上より翰墨に従事せんとするには、

最善の執筆法
を選んで之に
精熟すべし

筆を執るに定法なく、各人その欲する所に随ひ、姿態百出、却てその妙を覺ゆるもの、如くにも思はる、然れども何事も規矩に入つて、規矩を出づるに非ざれば、眞に妙境に入る能はざるものなれば、執筆に於ても、また一定の法が無くては叶はぬこと、考へらる。その進歩の遅速、入神の能否、果して如何にせば宜しきものならんか。最善の方法は、數多あるものではない、執筆亦た然り、其の最善の法を選んでこれに精熟し、習ひ性となりて、變通自在なるを要する、進歩の遅速の如きは、敢て問ふ所にあらず、入神の技また之に外ならぬのである。

三 雙鈎廻腕

然らば如何なる執筆法を以て、最も古くして、且つ最も

善なるものとなすべきか。

執筆として、最も古く傳へられ、且つ最も善なるは、雙鉤廻腕法であるから、これに隨ふことが肝要である。

雙鉤廻腕法は、『經韻樓全書』中に收むる所の、段玉裁の『述筆法』に基づくものである。段氏は説文學者にして、書家にあらず、然れども其の記する所は、書道の爲めに大に貢獻して居るので、之を説くこと二十枚の長きに及び、丁寧反覆を極めて居る。併しながら煎じ詰むれば、食指、中指の指頭を以て、拇指の指頭に對して、筆管を執ると謂ふに過ぎず、名指、小指は如何にすべきか、更に記載する所がない。我邦に於て此の法の最も熱心なる遵奉者は、松田雪柯にして、頻りに三本の指を以て筆を執り、

鳴鶴翁、巖谷一六翁も、亦たこれを試みられたが、中字を書するには、何等の差支なきも、大字に至りては、右に波磔を引く際の如き、筆管が、動もすれば指頭を脱して、紙上に落ち、偶々僅かに之を引き得るも、筆力甚だ微弱なるを免れない。是れではいかぬ、如何にしたらば善いかと、頗る苦心されたのであるが、恰も好し、明治十二三年の頃、金石學者にして、書法に精通せる、支那の楊守敬と云ふ人が、公使黎庶昌の隨員として渡來したので、三氏はこれに就て、質された所、楊氏の執筆法も、亦たこれと同じなので、詳らかに其の説明を聞くことを得、此に全く疑團を氷解することが出來たさうである。扱て此の執筆法は、楊氏が其の師潘存(孺初)より承け、潘

存は張照(得天)から傳へられたもので、單に食指、中指のみならず、更に名指、小指の二指をも加へ、四指の指頭を等しく筆管に當て、拇指の指頭を以て之に對するので、(卷頭鳴鶴翁執筆寫眞參照)斯くする時は、縱横斜畫、意の如くならざるなく、而して廻腕を以て、之を運ぶ時は、筆勢自づから強雄なるべしと云ふにあり、爾來鳴鶴翁も亦た其法に隨て筆を執つて居られる。但し楊氏が謂ふ所の此の執筆法は、大字或は正則の文字を書するに、此上も無き妙訣であるけれども、日用の細字を書するには、聊か面倒なれば、氏もまた多くは食指を高く掲ぐる所の一般の法に據つて居たことも、また参考とすべきもの無きにあらずである。

我邦にては、貫名菘翁が、獨り此の執筆法を用ひた、菘翁は何れよりして之を得來りたるか、其の徑路は、詳かでないが、書道に於ては、非常に苦心したる人なれば、所謂精神一到、遂に何れよりか、之を搜し得たるものであらう。

所が、支那で頻りに北派の書論を主張して居る包世臣(慎伯)は、嘗て黃乙生(小仲)の執筆を傳へて、「食指は須らく高く鈎し、大指は食指中指の間に加へ、食指をして、鵞頭の昂曲する者の如くならしめ、中指は内に鈎し、小指は名指の外に貼し、拒むこと鵞の兩掌、水を撥く者の如し、故に右軍は鵞を愛す、その兩掌水を行ふの勢を玩ぶなり、大令また云ふ、飛鳥の爪を以て地に畫する、此れ最も善

く指勢を狀するのみと。是の故に執筆はその近からんことを欲し、布指はその疎ならんことを欲す」と謂つて居るが、是れは現時の支那人が、一般に用ふる所の法と、差したる異^かりはないので、特に唱道せねばならぬといふ程のこともない、併し包世臣も亦た後に至りて、これを改めた。

(考)

内藤湖南(虎次郎)曰く、楊守敬は、北派の書を日本に傳へた點に於ては、非常に影響があつたもので、巖谷、日下部以下の、日本の北派と云ふものは、殆ど此の人に依つて開かれたと言つて宜しい、併し此の人に就て、日本人には考へ誤りがある、此の人を日本人は、北派の書家だ

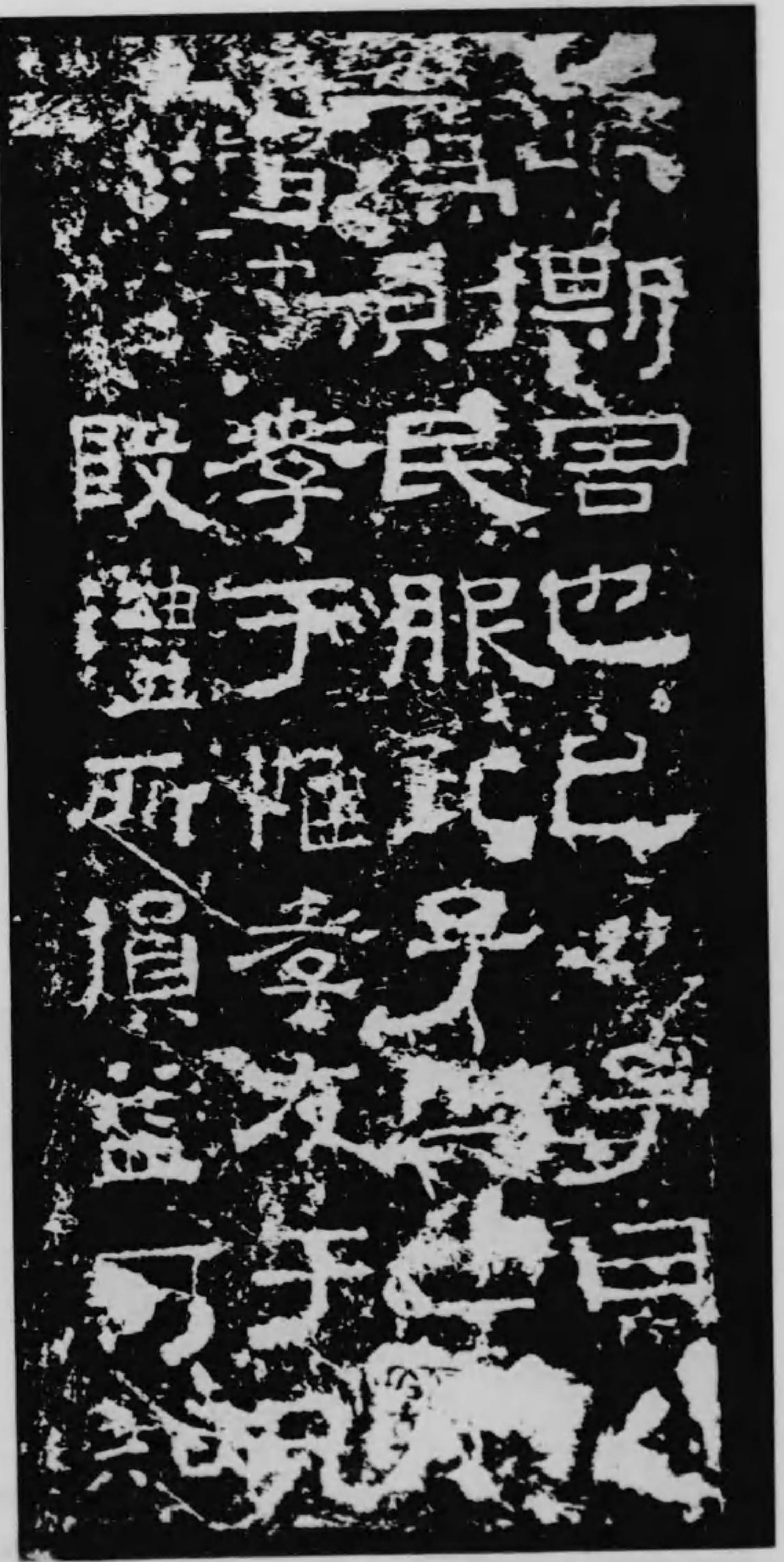
と思つて居るけれども、それは誤りである、元來此の人が、日本の書家に傳へた執筆法は、即ち張得天の法である。張得天は、康有爲の所謂帖學家の親玉で、北派の書に何等の關係もないのである。一體張得天の執筆法は、日本では全く北派に屬したものと考へて居るが、北派の書を支那で廣めた包世臣は、張得天の執筆と全く異つた法を主張して居る、さうして楊守敬は、執筆法に於て包世臣を祖述しないで、張得天を祖述して居る。(筆之友)

楊守敬 (清人)

楊守敬は、我邦書法の革新と、非常な關係を有つて居て、本書に於ても、今後屢々引合ひに出る人であるから、便宜上、其の經歷の大要を、左に掲げて置かう、若しも詳

一六
らかなる事が知りたければ、同氏の著に係る『學書邇言』の中に、『鄰蘇老人年譜』と云ふものがあるから、就いて見るべきである。

守敬、字は惺吾、鄰蘇と號す、道光十九年(天保十年)四月十五日の生れで、二十五歳の時、廣東文昌の潘存に師事し、學問に於ても、書法に於ても、其の感化を受くるとが、非常に多かつた、其の金石學に精通し、書も亦た上手であつたことは、何人も善く知つて居るが、本領は、寧ろ地理學とも云ふべく、地理に就ては、造詣が頗る深い、そして詩文の如きは、自分でも作らぬと云ひ、人も亦たさう思うて居り、經史の學問も、亦た善い加減なものであらうと云ふやうに思はれて居たが、なか／＼さう



蔡邕書石經 (後漢)

でなかつた、先年鳴鶴翁が褚遂良の「孟法師碑」を覆刻された時の如き、彼の長文の跋を書くのに、草稿も起さなければ、清書もしない。前にも後にも一通書いただけで、それを直ちに彫刻に附したのが、彼の跋文で、文章と云ひ、文字と云ひ、實に立派なもので、何人もこれを見て驚かないものはない、以前二度か三度か進士の試験を受けて及第せず、科擧に應ずるほど馬鹿らしいことはない、と謂つて居たのは、負け惜みでも何でもなく、此の一文を見て、直ちに其の學問文章の力を察することが出来る。又嘗て先年鳴鶴翁の令息の結婚披露の時に、偶々來訪したので、此の際に於ける遠來の客は、一層目出度いと云ふので、席に請じて宴を共にした。其の時記念の爲め、

何か書いて貰ひたいとの求めに對し、平素詩も作らず、文も作らないのであるが、此の盛宴に列して、黙つて居る譯にも往かないから、何か書かうと云つて、其の日は夜遅くまで歡談に時を移し、斯くて數日たつと、唐人の集句で、絶句を八首作つて、これを蠟紙に楷書で認めて送つて來た、書の立派なことは、言ふも更なり、其の詩がまた、至つて能く出來て居る、折柄來合はて居た森春濤が、それを見て、楊守敬は詩を作らぬなど云ふが、全くの謙辭で、此の手腕は實に驚いたものだと言ふが、全ともあつたさうで、なか／＼學殖もあつたと見える。斯く學問もあり、詩書にも長じ、又なか／＼賢い、記憶の確かな人で、詩を書いても、文を書いても、決して

字を脱^かかすやうなことは無かつたが、晩年になつては、誰でも知つて居るやうな、有名な詩を書いても、折々字を脱かして居ることがある、文字も死ぬるより、十年位お前のが、一番好いやうであつた。

潘存の人と爲

潘存(清人)

楊守敬のことを書くと、序でに其の師潘存のことが記したくなる。

潘存字は儒初、廣東文昌縣の人で、楊守敬の師である、博く群書を極め、篤く金石を好み、漢唐以來、歴代の書法に通曉し、筆を執るには、必らず雙鉤廻腕を用ひたもので、大字中字は言ふに及ばず、蠅頭細楷に至るまで、決して疎略にしない所は、到底他人の及ぶ所でない。實に

正しいものである、併しそれを以て猶ほ足れりとせず、若しも人が、其の書を求むれば、拒んで與へないのみならず、其の紙の裏に字を書いて、反故として字籥の中へ投込んで仕舞ふと云ふやうな謙抑な人であつたが、楊守敬は、「鄰蘇老人年譜」の中にも「孺初精詣卓識、倫匹あるなし」と書いて居る通りに、殆んど神様を見たやうに敬意を拂つて居た、其の書風には、素人好きのしない所もあるが、なか／＼の善書である。孺初の好んで臨して居たものに、「魏驥將軍高貞碑」と云ふのがある、此の碑は、乾隆年間に土を出たもので、正光十四年の建造に係り、書法最も方整雅鍊で、毫髪も寒險の所無く、六朝の碑中では、稀れに見る所のものである、併し孺初の臨帖の方法は、

形似に屑々たらずして、而も能く神理に合するので、見る者何れも驚いて傑作となすのである、指を屈すれば、今より三十幾年の前、楊守敬が日本に来て居たころ、鳴鶴翁は此の「高貞碑」の臨本を、楊守敬から貰はれた、其の時楊守敬の話に、潘先生は、門人に對しても、書を呉れると云ふやうなことをせぬ人であるから、世間では餘り見當らない、偶々ある所ものは、多くは先生の知らない間に、字籥中から搜出したものだと言つて居た、此の書の如きも亦た、或は其の中の一つかも知れない。

四 撥鐙法の價值

古來、執筆に撥鐙法なるものあり、傳へて王右軍の正傳と稱して居る、然れども所謂右軍の正傳なるものには、

唐以後の假託に出づるもの多く、悉く信を置くことは出来ない、其の右軍に出づると否とは、暫らく別とし、執筆法としての、撥鐙法の價值は、果して如何なるものならんか。

所謂撥鐙法とは、何人の命名に係るや、未だ詳かならず、且つ鐙の字の解釋の如き、或る者は、之をアブミとなし、馬に騎るもの、鐙を踏張りたる心持ちを意味すと云ひ、又或る者は、鐙は燈に通ず。トモシビなり、燈を掻き立つるの意に取ると云へり、馬上に鐙を踏み張るの疎豪なると、密室に燈火を掻き立つるの細密なるとは、固より同日の論でない、而も兩説とも、之を執筆法に適用して如何なる意味を表はすやの一段に至りては、兩者ともに漠然として、捉

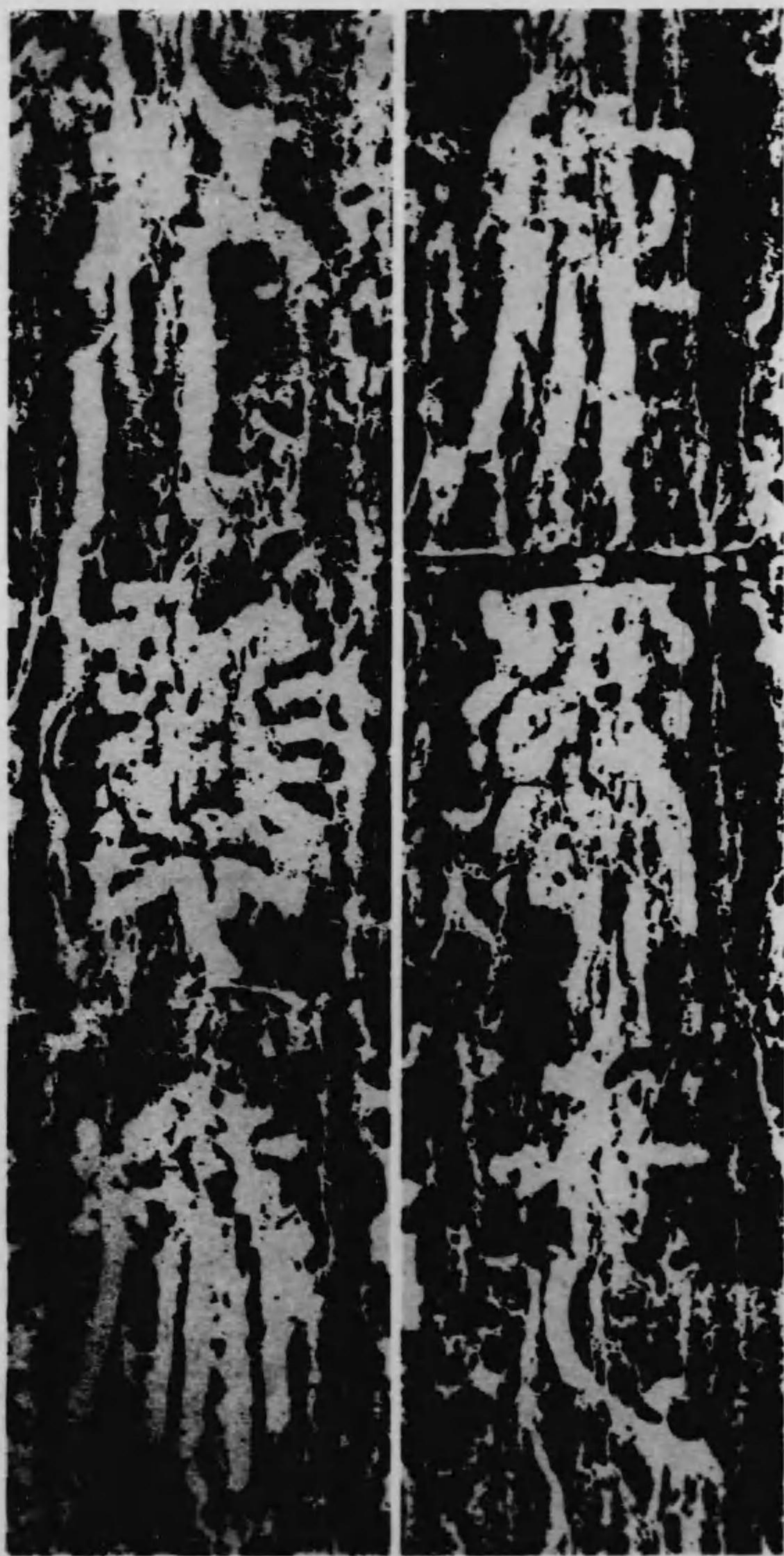
撥鐙二説あり

意味漠然

ふる所なく、随つて其れに如何なる價值ありやも、殆んどこれを定むるに苦しむ。

古來傳ふる所の撥鐙法には、種々の方法ありて一定せず、謂はば撥鐙法とは、執筆法の別名なるが如き感じもする、最も正しき執筆法のみが、撥鐙法ならば、之に隨ふべきは言ふ迄もなきことであるが、今日の如く、其の解釋すら一定しないやうにては、之に隨ふの可否も、其の價值も、何とも斷言することは出来ないであらう。

然るに徳川の中葉以後、明朝の書風が、盛んに流行するに及んで、所謂唐様の文字を書く人は、誰も彼も、我こそ撥鐙法の正傳を得たるが如く言ひ觸らしたのは、無意味も亦た甚しと評すべきでは無からうか。



要するに、如何なる藝術に拘らず、其創始の時代には、法則と云ふものはない、法は前人の成績を見て、これを研究し、後代の人が、それに由て容易に研究の歩を進め得る爲めに設けたものであるが、併しまた法の弊も、實に恐るべきもので、決して拘泥してはならぬ、殊に撥鐙の如きは、その名が残て居る爲めに、強ひて之に解釋を加へ、何とかして、適當に解釋しなくては、書家の名折で、もあるかの如く、考ふるに至ては、愚も亦甚だしと謂はねばならぬ、撥鐙法と云ふとを知らないからとて、文字が巧みに書けぬ譯もなく、それを知つたからとて、巧みに書ける理由もない、左様な吟味をする暇に、大に練習すべきである。

(考)

陳思曰く、鏡とは馬鏡のことである。蓋し筆管を以て、名指中指の尖に著け、圓活にして轉動し易からしむ、執筆既に直きときは、虎口の間、圓活なること馬鏡の如く、足、馬鏡を踏むこと淺ければ、則ち轉換し易し、手に管を執ること、亦た其の淺からんを欲す、淺ければ則ち撥動し易し。林韞曰く、我れ昔し教を韓吏部に授かる、其の法を撥鏡と曰ふ、推、拖、撚、曳、是れなり、法、此に盡く。李後主曰く、書に七字の法あり、之を撥鏡と謂ふ、所謂法とは、擗、壓、鉤、揭、抵、拒、導、送、是れなり。

段玉裁述筆法に曰く、撥鏡の二字は、正に燈火の古字で

あつて、馬上の脚凳ではない、今の人が、錫油燈に、錫を用ひて燈括を爲り、其の底を圓平にし、中に其の柄を植て、兩指を以て其の頂を撮り、其れをして底平ならしめ、燈草を壓して前に移す、是れ正に筆を捉る法の如し、紙に到る沈着の喩へなり。

五 把筆の高下

把筆の高下にも、また自から法あるが如し、盧樵云ふ、
「筆を把るの淺深は、紙を去る遠近にあり、遠ければ則ち浮泛虚薄、太だ近ければ則ち鋒を楯へて體重し」と。解縉云ふ、「眞書は毫端を去る一寸、行書は二寸、草書は三寸、掣すること三分にして、而して一分紙に着くときは、勢ひ則ち餘りあり、掣すること一分にして、而して三分紙

筆を持つの高
下は臺の高低
に因る

に着くときは、勢ひ則ち足らず」と、如何。

筆を持つの高下は、字を書く臺の高低に依つて、必ずしも一定しない、臺が高いのに、上の方を持つならば、手が顔の前に來て、逆も字は書けない、さればとて、臺が低いのに、餘り筆の下の方を持つと、益々低くなつて、是れまた運筆に便利が悪い。併し概して云へば、楷書には筆管の、下から三分一位の所に拇指を當て、行書には中央より少し下、草書には約そ中央位の所が宜しからう、餘り下だと、上の方がぶらくするし、餘り上だと力が入らない。

六 執管法の異同

世間傳ふる所の執筆には、捻管、撮管、提斗、其他の諸法あり、筆の大小、書すべき場所の如何に由りて、之を

異にすと云へり、然るに雙鉤廻腕の執筆法は、一以て萬
般に適用すべきか。
文字を書くには、廻腕執筆に勝るものはないので、筆の大
小を問はず、場所の如何に拘はらず、此の執筆法で、押し
通すのである。

併しそれは普通紙に臨んで書く時のことで、或は壁に題
するとか、又は立てたまゝの板とか、柱とかに書かねば
ならぬ場合は、其の時に適する方法を取る爲め、多少取
捨せねばならぬこともあらう。

(考)

握管法 陳釋會曰く、握管は四指中節に管を握る、沈着力あり、語勅勝
疏を書くるに用の。韓方明曰く、頭指より小指に至り、管を以て、第一

二指節の中に於て、これを搦す、圖障を書くるにこれを用ふ、提轉甚だ
惟異なり。

捻管法 陳釋會曰く、捻管は、大指と、中の三指と、管頭を捻してこれ
を書く、案左に側立して、長幅釣字を書く。

撮管法 韓方明曰く、撮管は、五指を以て其の管末を撮るを謂ふので、
惟だ大草書、或は圖障に書するにこれを用ふ。

提斗法 韓方明曰く、提斗運肘は、勝署を作るの法で、撮管と畧ほ同一
である、斗が大なれば、後ち一指を以て、これを拒み、斗が小なれば、
後に兩指を以てこれを拒む、其の法たる、順は易く、逆は難し、故に拒
まざれば、不可である。

七 腕法の能否

問て曰く、古人腕法を説く、甚だ詳なり、所謂懸腕、提
腕、枕腕等の如きは、字の大小に隨て、之を取捨して可

なるか。

字を書くには、廻腕執筆法を用ひ、懸空にして筆を行ふのが一番宜しいので、正則に文字を書くには、此法を用ふることが、最も大切である、故に大字は、何人も必らず懸空にして書かねばならぬが、中字小字になると、如何に稽古をして、廻腕執筆法では書けない人がある、それは其の人々の天稟に因るのであるから、何とも致し方がない、強ひて行つて見た處で、徒らに腕を勞するのみで効能は見えず、併し中には細字に至るまでも、それで立派に書く人がある。

現に鳴鶴翁の門人で、辭令を書くのに、何時も廻腕法を用ひて居るものがある、試みにそれでは疲れはせぬかと

腕の天稟同じ
からず

楊守敬も亦細
字は廻腕法に
よらず

問うて見るに、少しも疲勞は感じない、提腕枕腕でやるも同じことだと謂つて居る。然るに又楊守敬の如き大家でも、細字を書くには、支那人一般の執筆法で、盛んに書いて居る、そして曰ふに、廻腕で細字を書くことは、甚だ面倒だから、何時もこれで行つて居るが、嘗て潘先生(儒初)にそれを見附けられ、先生の謂はるゝに、余は數十年來、努めて廻腕執筆法を用ひて居るに、君等は何時も便法に依つて居るか、笑ふが如く、叱かるが如くに曰はれたので、大に當惑したとがあると言つて居たさうな。其の位であるから、練習には、無論廻腕法を規則正しく用ふることに慣れなくてはならぬが、天稟それに適しないものは、止むを得ずして提腕、枕腕を用ふること

もあるであらう。

(考)

懸腕 陳繹曾曰く、懸腕は、空中に懸着して、最も力がある、今代惟だ
鮮于郎中のみ、善く懸腕にて書す、余これに問へば、瞑目して臂を伸べ
て曰く、臆々々。

提腕 肘を案に着けて、手腕を虚提することである。

枕腕 左の手を以て、右の手腕に枕せしむることである。

張芑堂問て曰く、腕力は如何に法を用ふべきかと、梁同
書曰く、極めて軟筆を使へば、自づから見はれる、譬へ
ば人が一の強き者を持するとする、其の時に、之をして
直ならしめんとするには、力を用ふる所がないが、一つ
の弱き者を持つて居て、之をして偃せしめざらんと欲せ

懸腕

提腕

枕腕

軟筆腕力を強
らしむ



瓦 鐘 文 字 (秦 漢)

ば、全腕の力が、自然に兩指の端に集まるから、其の實
書く者は、只だ指運を知つて、腕力あるを知らない有様
になる、此れを悟れば、昔し王羲之が、其の子王獻之の
筆を背後から撃ひいたのは、正に是れ其の腕力が到つて居
るか、否やを驗したものとたることが知れる。

八 藏鋒渾厚

古來藏鋒と云へば、筆の鋒尖を藏くすことで、右せんと
欲せば、先づ左よりし、下せんと欲せば、先づ上よりす
と云ふ風に、筆を起す時に、其の鋒尖を見せないのみな
らず、一點一畫、筆の終る所にも、また鋒尖を露はさな
いやうに、巧みに筆を廻して、痕あとを見せないやうにする
とだと云ふ説が、一般に行はれて居るのであるが、又他

の説に據ると、力を内に藏する意味で、筆鋒を隠匿することではないと云ふ、此の説大に取るべき所あるが如し、如何。

痛快沈著

藏鋒とは含蓄渾厚の意味で、所謂痛快沈著、毫髪も遺憾なきを云ふのである。

藏の字の字義
二様あり

鳴鶴翁の説によると、藏鋒の藏の字には、二つの意義がある、一は藏匿の藏で、隠すと云ふこと、一は含蓄の意味で、貯へると云ふことであるが、古來藏鋒の藏の字を、誤つて隠すの意に解したものが少なくない、隠すと解すれば、鋒を隠すのであるから、筆の尖が、少しも外に顯はれてはならぬと云ふことになる、それを實際に行はんとするから、種々六ヶ敷い問題が起るのであるが、

寫經、鋒を顯
はす

王右軍八面出
鋒

それは間違ひである。例へば弘法大師、橘逸勢等の如き唐代の書法を直傳して歸つた人の筆蹟、及び名手の寫經等にも、今日に傳つて居るものは、幾許もあるが、筆鋒は何れも隠れて居ない、而して古刻精拓の碑帖等を熟覽研究して見るに、其の字は皆銳鋒を露はし、矛戟森峩、迫り視るべからざるの勢ひあり、殊に王右軍は、「八面鋒を出す」と傳へられ、藏鋒の藏の字が、藏匿の意味でないことは、之を以ても明らかに知ることが出来る。

然らば之を含蓄の意味に解するのは、如何であるかと云ふに、所謂含蓄渾厚で、満身の精力を、筆墨の間に充満せしむるの意味である、然らざれば「痛快沈著」といふことが、少しも解らないではないか、此の痛快沈著と云ふ言葉は

貫名菘翁も、餘程此れを好まれたと見えて、屢々これを反覆し、殊に翁は、更に「毫髮無遺憾」の五字を加へて、「痛快沈著、毫髮遺憾なし」と云ふことを以て、門人にも教へられたさうな、此事は菘翁の高弟たる越智仙心が、嘗て鳴鶴翁に語つたこともあり、又翁が楊守敬に聞かれた所の、其の師潘孺初の藏鋒説も、之と同様であつたさうな。「所謂藏鋒とは、沈著にして、筆力紙背に透るの謂ひであるから、粗獷者が硬筆を以て、力と爲すが如きは、固より藏鋒にあらず、さればとて嬌積者が、浮滑を以て美と爲すが如きも、亦た藏鋒にあらず、藏鋒は、喩へば直道の士の、深沈にして露骨ならず、其の中に藏する所測るべからず、人をして一見し盡さしめざるが如き是れであ

る、世の鋒穎を包むを以て藏鋒となすの説に誤らるゝ者は、其の字皆な土木偶人の如し」とは、善く之を説明したものである。菘翁が、支那との交通もまだ不便であつた彼の時代に、斯る事まで、遺憾なく研究して居たのは、眞に敬服の外なく、其の筆蹟の妙なる、亦た尤も千萬の次第と謂はなければならぬ。書は小技の如く云ふものもあるが、古來六藝の一に加へられ、其の妙域に達するとは、決して容易でない、單に筆鋒を藏すとか、顯はすとか云ふやうなことでは、逆も藝術の蘊奥を極め得るものではない、藏鋒の一事は、學者の大に意を留むべき所のものである。

(考)

梁同書曰く、痛快沈着と云ふとは、只だ米公(芾)だけが能くこれに當つて居る、即ち所謂垂、縮しゆくまらざるなく、往、收めざる無き八字の妙諦で、亦た即ち古に所謂藏鋒が是れである、此れを下つて、米を學ぶものでは、吳雲壑の如き、痛快沈着と謂ふべく、形似も神似も、遺議する所はないが、而も骨髓の内に、尙ほ微しく濁を帯びて居る所を見れば、此の四字を能く兼ねることは、固より容易でないことが知れる、況んや近今の人に於てをやである。近人の書中、まゝ初めて見た時には、平々であり、或は淺露に似たものでも、而も細かに看、久しく見て、人をして厭かじめないものがある、此れ即ち沈着の能く然らしむる所で、必らずしも停頓遑辭の處に於て、長じて居

るが爲めとは定まつて居ない、これを總ぶるに、古今人相ひ及ばずで、今の人は何うも古の人には及ばない、晋唐宋元より以來、便ち歴々として是の如くである、併し今の人古の人に及ばないのでなくて、今の時が古の時に及ばないのである、必ず盡く古人を以て、これに較べんと欲せば、則ち完膚なしである、則ち南宮(米芾)の如き妙手であつても、若しも古穆の兩字に就て云ふならば、便ち已に隔塵の感がある、蓋し氣運と機會とが、これが性情を爲すのであるから、これが爲めに強ふることは出來ない、設しも強ひて古穆に至らしむならば、則ち墨豬とか、木算子とか云ふ様な、流弊が百出して、得失孰れに歸するか分らぬことになる。定武蘭亭は、斯界に於け

る麒麟鳳凰の如きもので、久しく見ることは出来ないが、唐人には自づからこれを見たものが多い、而るに褚登美（遂良）は、即ち我が法を用ひてこれを行行、全く定武の面に似て居ないのは、勢ひ能はざる所があるからである。又曰く、「屋漏痕」、「古釵脚」と云ふことは、必らずしも是れ草書にこれがあると定まつては居ない、行書も亦た其の通りである、其の意味は、只だ是れ筆の直下する處を、留め得て注し、飄忽ならざらしむるのみであるが、亦た是れ、臨池作意の能く然らしむる所ではない、「擬山園帖」は、本と取るに足らぬものであるが、扁聯に古文鍾鼎を闡入するに至ては、則ち大に謬つて居る、皆な怪しきを好むもの、變相で、亦た所謂深文淺陋に艱むものである、



五鳳二年碑（前漢）

書體には、只だ平直中正があるのみで、古より他の道は無い。

又曰く、藏鋒の説は、筆が鈍錐の如くなることを謂ふのではない。自來書家で、筆鋒を出さないものはない、古帖を開けば、具さに證明することが出来る。藏鋒とは、只是れ處々に筆を留め得て、直走せしめないことを云ふのである。米老が云ふ所の、垂、縮ちぢまらざるなく、往、收めざるなしの二語は、是れ書家の無等々呪である。

九 落筆痛快

問て曰く、梁同書曰く、「落筆快なれば、則ち意出づ、此の意の字は、是れ自然に流出する者にて、意筆先に在りと云ふとは、大に分別あり」と、自然の流露は素より喜ぶ

べきであるが、猶ほ修業中のものに在ては、恐らく未だ能はざる所なるべし、初めは意筆先に在るに力めて、漸次に流露の妙境に進むこと如何。

落筆快なればの快は、即ち痛快沈着の快であつて、筆を下すに心持ちよく、愉快に書き初めると、自然に興が湧いて、覺えず自家の性情を流露するので、古人の所謂、「意、筆先に在り」と云ふのとは、大に相違があると云ふの意味なれば、假令、修業中でも、此の心得は必要である。

意、筆先にありと云ふのは、豫め何如なる風に書いたものかと、書く前に、其の字體などを意中に浮べること、斯うなると、勢ひそれに束縛されて、天真爛漫、性情流露の文字を書くことは出来ない、是れは自分で字を書く

時の心持を云つたので、臨帖の時とは、自から場合が違ふのであるから、初學でも、老熟家でも、紙に臨んだならば、一樣に此の心持でなくてはならぬ、古人を離れた一家の書と云ふものは、畢竟此處から出て來るのである。

十 筆力紙背に徹す

問て曰く、梁同書曰く筆力紙背に透るとは、天馬空を行くと云ふが如く、其精氣結撰して、墨光浮溢するを状するのみと、然るに支那人の字を教ふるものを見るに、墨痕をして、力めて紙背に透らしめんとし、且つ曰く、是れ墨色をして紙織に浸潤せしむるの法にして、能者の筆蹟を見るに、常に此に達せざるなしと、余以爲らく支那人の書は、其巧拙如何に拘はらず、概ね字に重みあり、

日本人の書は、概ね軽くして、紙上を刷過したるが如きの觀あり、書を學ぶに當りて、紙背に透らしむるを力むも、亦た可ならずや。

筆力紙背に徹すと云ふのは、矢張り梁山舟の説の通りで、字を書く人の、精神氣魄を形容したのに過ぎない、昔者王右軍の字を書するや、墨の木に入ること一寸と云ふことから、書道のことを入木道と稱するのであるが、如何に右軍の筆でも、そう深く沁み込むものではない、是また其の筆力の形容に過ぎないのである。

若しも手先の技を以て、墨痕を紙背に透らしむることを工夫する如きならば、それは些末のことに力を盡すのであつて、書を學ぶの本領ではない、殊に紙に由ては、

入墨一寸亦た
是れ形容のみ

裏に透らないのもあるから、それに拘はるのは宜しくない、精熟を積んでさへ往けば、墨も能く紙に入り、自然に重みも出來て來る。

(考)

梁同書曰く、字を書くには、氣力のあることが大切である、併し氣力は須らく熟得から來るべきで、氣があれば則ち、自ら勢ひがある、大小長短、高下敲整、筆の至る所に隨ひ、自然に貫注して、一片版を成し、却て絲毫の擺布を着け得ない、是れは精熟の後ち自ら知るであらう。

十一 用筆は口訣に由る

問て曰く、趙子昂曰く、「用筆は千古不易、結字は時に沿したがつて異れり」と、結字が時代に隨て同一でないことは、云ふ

迄もなく、用筆も亦た漢魏と唐宋元明とは同じからざるやに思はる。甚しきに至ては、「十三跋は是れ偽物なり、子昂陋なりと雖も、未だ必らずしも是に至らず、然れども今世其説盛んに行はれ、病を受くること最も深し、其の陳隋人の結字は、古ならざるに非らず、而も俊氣に乏しの二語の如きは、五百年外佳子弟爲めに多く誤らる」と謂つて居る。先生は用筆に於て、古人の何人を取らるか、將た獨創にして、何人にも據られざるが。

用筆は、初學の爲めに語るべきものでない、法は千古不易かも知らぬが、運用は人に因て同一には行かぬ、これは須らく自得すべきもので、師授は僅かに、其の未だ到らざる所を導くに過ぎない、而も其の人を見て、口訣に由るべき

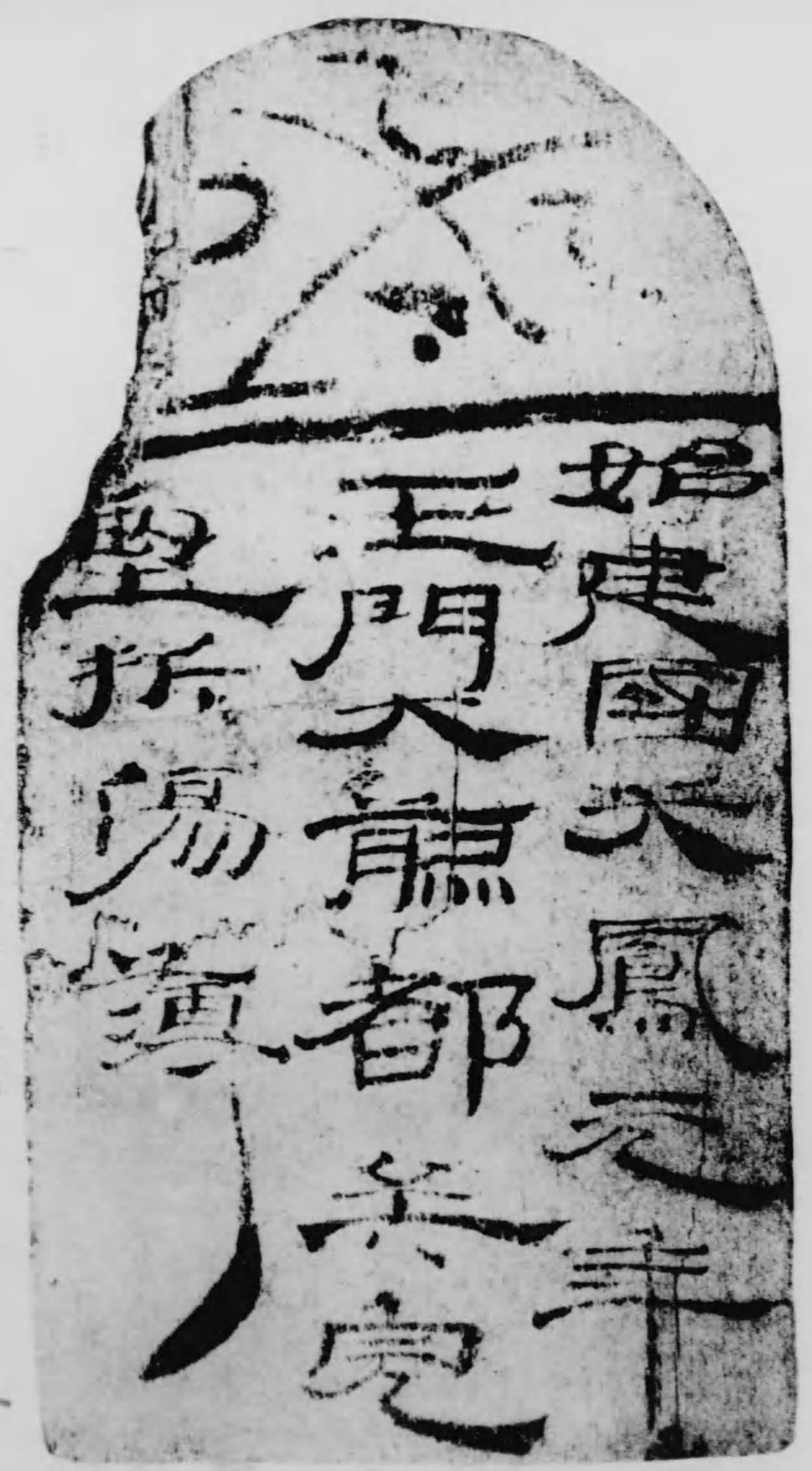
ものである。

凡そ書道は、實地の練習に依つて上達するのであるから、文章を以て之を教へることは、甚だ困るのであるが、用筆は殊に左様である、嘗て鳴鶴翁が、楊見山に遇はれた時にも、用筆は是非とも口訣でなければならぬ、と云ふ話が出たさうな、思ふに此の用筆は、其人の技術が其處に進んで居ないのに、漫りに之を授くる時は、飛でもない病氣を起して、遂に取返しの附かないことになるからであらう。それに就て嘗て翁の説に、「例へば弘法大師の十二點法の如き、是れ用筆の一端を示したもので、用筆を文章で示せば、彼の様なことになるであらうが、世に所謂大師流の文字が、如何に厭味の多い、病に罹つた文

字であるかは、何人が見ても、直ちに之を知ることが出来る。大師ほどの賢い人が、何故に斯様なことをしたかと思はれる程である」と云はれたことがある。畢竟まだ其處まで技術の進んで居ないものに、初めから用筆法を授けた爲めに、斯る弊害に陥つたのである。用筆は知らねばならぬものだが、これを説くには、餘程の注意が大切である。

十二 書法は唯だ縦横あるのみ

用筆法を文章に書いて、これを一般の人に示す時は、自己の技術の進歩の度合をも計らないで、漫りに其の用筆法に據り、これが爲めに大病を受けるとの先生の説は、既に承つた通りであるが、併しながら、筆を執ることだ



流砂發掘木簡一 (前漢)

千變萬化、此
の二語に過ぎ
ず

けは教へられたが、筆の用ひ方を教へられないでは、筆
の下ろしやうがなくて、初學のものは、取分けて甚だ困
ること、思はるゝが、極めて一般的にして、然も弊害少
なき書法あらば、承りたし。

書法の要は、横せんと欲せば、縦よりし、縦せんと欲せば、
横よりす、千變萬化、此の二語の外に出でず。

乃ち横の棒を引かうと思へば、先づ縦に筆を下ろして、
それから横に引き、縦の棒を引かうと思へば、先づ横に
筆を下ろして、それから縦に引く、此の二つを應用する
ならば、如何なる文字と雖も、書けないものはないので、
點の如きは、如何にして宜いか、鳥渡迷ふやうであるが、
これは所謂「三折法」に據るので、結局縦横二畫の何れかの

短かいものと見て宜しいのである。併し此の二語とても、これに拘泥して、如何なる場合にも、必ず此の法を形の上に現はすことになる、千篇一律、また少なからざる弊害を醸すことになるのであるから、是れまた大に其の運用の如何を心得なくてはならぬ。

(考)

梁の武帝、鍾繇の書法を觀る十二意

- 平は 横を謂ふなり。
- 直は 縦を謂ふなり。
- 均は 間を謂ふなり。
- 密は 際を謂ふなり。
- 鋒は 端を謂ふなり。

- 力は 體を謂ふなり。
- 輕は 屈を謂ふなり。
- 決は 牽掣を謂ふなり。
- 補は 足らざるを謂ふなり。
- 損は 餘りあるを謂ふなり。
- 巧は 布置を謂ふなり。
- 稱は 大小を謂ふなり。

顏眞卿が張旭の筆法を述ぶる十二意

長史曰く、夫れ平を横と爲す。子之を知れりや。僕思ひ以て對へて曰く、嘗て聞く、長史示して、一平畫を爲る毎に、皆須らく縦横象あるべからしむ、此れ豈に其謂にあらむや。長史曰く然り。

直を縦と爲す

均を間と爲す

密を際と爲す

鋒を末と爲す

又曰く、夫れ直を縦と爲す、子之を知れりや。曰く豈に直なる者は、必らず之を縦にす、斜曲ならしめざるの謂ひを謂ふにあらずや。長史曰く、然り。

又曰く、均を間と爲す、子之を知れりや。曰く、嘗て示を蒙むる、以て間に光を容れざるの謂ひか。長史曰く、然り。

又曰く、密を際と爲す、子之を知れりや。曰く、豈に鋒を築き筆を下す、皆完成せしめ、邪曲ならしめざるの謂ひを謂ふにあらずや。長史曰く、然り。

又曰く、鋒を末と爲す、子之を知れりや。曰く、豈に末は以て畫を成し、其鋒をして健ならしむるの謂ひを謂はざるか。長史曰く、然り。

力を骨體と爲す

輕を曲折と爲す

又曰く、力を骨體と爲す、子之を知れりや。曰く、豈に筆を趨つすれば則ち點畫皆筋骨あり、字體自然に雄媚の謂ひを謂はずや。長史曰く、然り。(仰筆尖鋒にすべからず、亦た臥筆搨下すべからず、故に趨筆して行く體以て雄にして而して媚なり。)

又曰く、輕を曲折と爲す、子之を知れりや。曰く、豈に筆を鈎し角を轉じ、鋒を折りて輕く過ぎ、亦た謂ふ轉角は暗過を爲すの謂ひを謂はずや。長史曰く、然り。(右軍の轉折能く暗過を爲す、董思白曰く、折釵股は、我れ顔の字に於て之を得たり、皆篆法を以て楷を爲つり、用筆最も精なる者なり、更に方稜矩の如きものあり、之を折と謂ふ、唐人の帖中に最も多し、起つて復下す、

決を牽掣と爲す

不足を補ふ

五四

之を搭たふと謂ふ、歐の書温公碑中、「次堂」の字、「九成宮」風氣の類是れなり。米襄陽曰く、垂畫は篆に従ひ、折搭は乃ち隸より出づと、是れなり、下つて姜白石譜中の折搭、又是れ一意なり。又曰く、決を牽掣と爲す、子之を知れりや。曰く、豈に牽掣は撇たり、決意は鋒を挫き、怯滯なる能はざらしめ、險峻にして而して成らしめ、以て之を決と謂ふを謂はずや。長史曰く、然り。又曰く、足らずと爲るを補ふ、子之を知れりや。曰く、嘗て長史に聞く、豈に結構點畫、或は趣きを失ふ者あり、則ち別の點畫を以て、旁ら之を救ふを謂はずや。長史曰く、然り。

有餘を損す

巧に布置を爲す

又曰く、餘りありと爲すを損ます、子之を知れりや。曰く嘗て所授を蒙むる、豈に趣き長く筆短かく、常に意氣をして餘りあらしめ。畫足らざる如きの謂ひを謂はずや。長史曰く、然り。又曰く、巧みに布置を爲す、子之を知れりや。曰く、豈に書せんと欲して先づ豫め字形の布置を想ひ、其れをして平穩ならしめ、或は意外に體を生じ、異勢あらしむ、是れ之を巧と謂ふを謂はずや。長史曰く、然り、(意外に體を生ずるとは、異勢あらしめ、獨り生面を開き、人の歩趨に隨はず、八面變化する是れなり。)

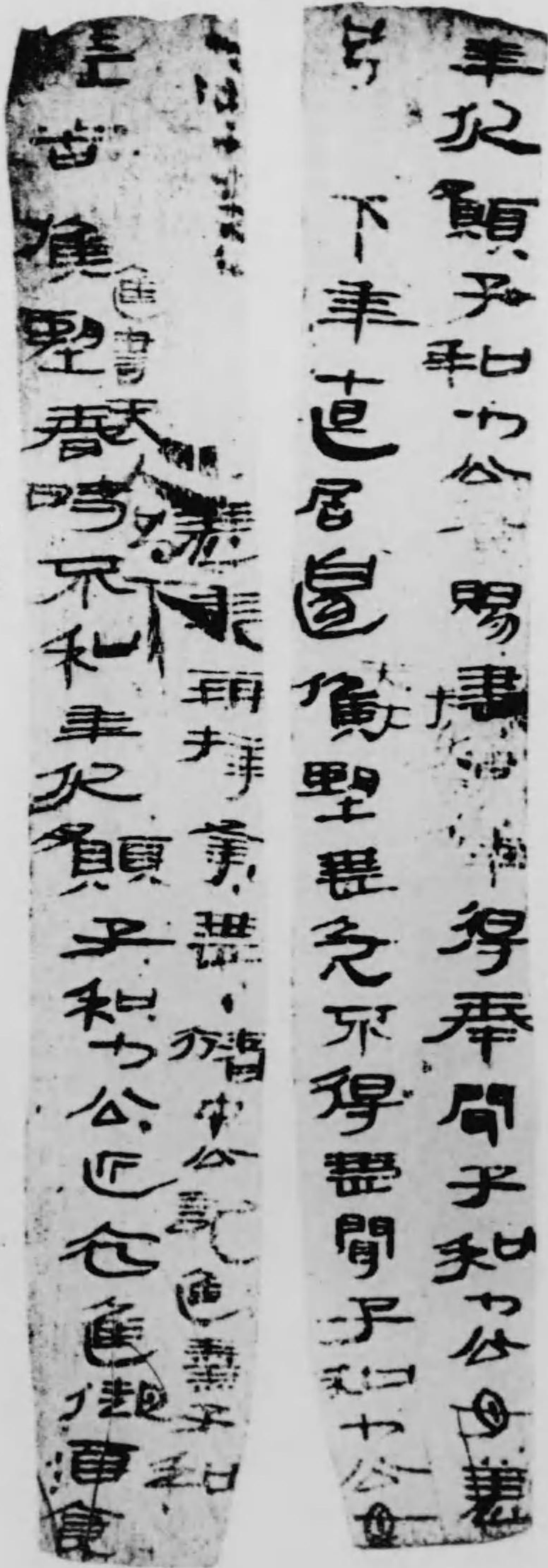
十三 行畫、曲を用ふ

五五

古人善く曲を用ふ

曲は用筆上當然なり

問て曰く、「古帖の後人に異なるは、善く曲を用ふるに在り、閣本に載する所の、張華、王導、庾亮、王廙の諸書は、其行畫一黍米許といへども、曲らざるものなし、右軍己に稍や直なり、子敬又甚しきを加へ、永師に至ては、使轉の處に非ざれば、復た用曲の妙を見ず」と云へり、試みに「鄭文公碑」を取て之を見るに、一點一畫、悉く曲を用ふるが如きも、「龍門造像二十品」に至りては、必らずしも然らざるが如し、所謂圓筆には、多く用曲の跡あり、而して方筆には此事少なきにあらざるやを思ふ。如何。畫をして、悉く直ならしめば所謂木算子の狀を爲すもので、字にあらず用筆上、縦横ともに、曲るのが當然である。但し其の多少に至つては、固より一定しない。



流砂發掘木簡二 (前漢)

縦横線とも、眞直ぐいものばかりで字を書くなれば、新聞の廣告などにあるゴシック文字と云ふものと同じく、字としては、誠に致方のないものが出来る、殊に用筆上、横でも縦でも、曲るのは當り前であつて、自然に斯くならねばならぬ、又例へば米粒程の點でも、少しも曲ると云ふことが無いと、誠に趣きの無いものになつて仕舞ふ、三折法を用ふるのが、用筆上の法則であるから、三折にすれば、無論、曲つたものが出来る、但し其の人と、其の時とに據つて、曲り様の大小は勿論あるに相違ないが、形似の上からのみでなく、深く筆意を味つて見れば、何れも曲意を含んで居る、又圓筆方筆云々と云ふやうなことに就ては、一概に斷言する譯には往かないのである。

十四 正鋒と側鋒

正鋒、側鋒の説如何、正を用ふるものは、常に正を用ひ、側を用ふるものは常に側を用ふべきか、或は一字の中、正側并せ用ふるも不可なる所なきか。

正鋒と曰ふも、錐の如くにては、字は書けず、側鋒と曰ふも、鈎の如くにては、用ふるに所なし、筆を使用するに當ては、勢ひ側鋒たらざるを得ず、縦横變化、正側並び用ふるは、自然の勢なるべし。

筆は使はない時には、先きが尖つて眞直になつて居るが、字を書く時には、必ず曲る、曲れば則ち側鋒である、如何に正鋒で書くと云つても、錐か何かを使ふやうに往くものではない、それであるから、正と云ひ、又側と云

正鋒、側鋒の
并用

ふた所で、さう判然と區別の出来るものではない、唯だ筆鋒の向けやう如何によつて、正側の名を附けるかも知らぬが、さうだとすれば、一字を書くうちには、自から正側兩方を混用するやうになる、若しも正鋒と云ふことが、筆の尖を畫の中央に置く書方を云つたものとすれば、何時もそればかりで、字を書くのは、至つて究窟で、運筆が自由にならない、さればとて、何時も筆の光を、畫の邊りにのみ置くのも、實際上頗る不便を感じる次第である。

古人が「側筆にして、妍を取る」と云つたのは、此の側鋒のことであるが、漫りに之を用ふるときは、字體輕浮にして、雅を傷くるの虞れがある、殊に側鋒と云つても、筆

側鋒、妍を取
る

六〇
 の腹を使ふほどに甚だしくなつてはならぬ、又側鋒は妍
 を取ると云つても、悉く側鋒ばかりで字を書くに云ふ意
 味でもない、所謂運用の妙は、一心に存するので、何の
 位な程度までに側鋒を用ひて善いか、悪いかと云ふやう
 なことは、精熟の結果、自然に解ること、豫め法則を
 定めるなどのことは勿論出来ない。
 序に筆のことを述べて置きたいが、それに就て梁同書は
 「筆は軟なるを要す、軟なれば則ち適、筆頭は長きを要す、
 長ければ則ち靈、墨は飽なるを要す。飽なれば則ち映」と
 も云つて居る。試みに之を鳴鶴翁に問ふに、翁も以前は、
 毛の長い、軟かいのを使つて居られたさうであるが、長
 く軟かくて、毛の質が善くないと云ふと、ぐにやくす

るばかりで、少しも字が書けない、そこで近頃は、長さ
 も普通のもので、腰も餘り弱くないのを使つて居られ、
 墨は寧ろ濃い方で、充分に付けて書く様にして居られる
 さうな。
 傳ふる所に依れば、蘇東坡の字を書するは、濃墨を筆に
 飽かす、故に墨痕漆の如く、以て後世に傳ふるに足れり
 と、然るに又筆に墨を濡すと三分、惜墨金の如く、渴筆
 にして姿態を取るものもあり、之に反して殊に淡墨を用
 ひ、濕潤以て生氣を得たりとするものとあるが、何れも
 一長一短で、其の人々の好む所もあり。又書く所の紙に
 もよるから、一樣に云ふとは出来ない、隨て何れが正し
 いか、何れが正しくないとか云ふとは、無論ないので

ある。清朝の書人で、查士標の書には、濃墨を少し用ひて、寧ろ渴筆に近いやうな書方で面白味を生じ、又王鐸の書には、濃墨もあるが、少し淡くは無いかと思はれる墨を、十分に筆に含ませ、文字をニヂませた爲めに趣致を生じて居るのもある。

(考)

包世臣曰く、用筆の法は、畫の兩端に見はる、而も古人の雄厚恣肆、人をして斷じて企て及ぶべからざらしむるものは、則ち畫の中截に在り、蓋し兩端出入操縱の故は、尙ほ迹象の尋ねべきあり、其中截の豊にして怯ならず、實にして空ならざる所以の者は、骨勢洞達するに非ずんば、倅に致す能はず、更に兩端の雄肆を以て、彌々中截

をして空怯ならしむる者あり、試に古帖の横直畫を取り、其兩端に蒙らしめ、而して其中截を玩ばゞ、則ち人々共に見ん、中實の妙は、武德以後遂に之を言ふを難んず、近人鄧石如の書、中截員遒麗ならざるなく、其次劉文清の中截は左處に近きも、亦た能く潔淨充足せり、此外は則ち並びに未だ夢見せず。

包世臣また吳育(山子)の言を傳へて云ふ、吾子の書は、専ら筆尖を用ひて直下し、墨を以て鋒を裹み、力を副毫に假らず、自から以て藏鋒内轉と爲すも、形ち薄くして怯なり、凡そ筆を下すには、須らく筆毫をして、紙上に平鋪せしむべし、乃ち四面圓足す、此れ少溫(李陽氷)の篆法にして、書家の眞祕密語なり。

筆々断じて後
ち起る

北碑は畫勢長
し

筆を提げ得て
中起さば自然に

包世臣また朱昇之(青立)の言を述べて云ふ、書を作るには、
須らく筆々断じて而して後ち起るべし、吾子の書は、環
轉の處、頗る断勢なし。

又曰く、北碑の畫勢は甚だ長し、短かきこと黍米の如く、
細きこと織毫の如きも、而も出入收放、偃仰向背、避就
朝揖の法備さに具はり、起筆の處、順入する者は缺鋒な
く、逆入するものは漲墨なく、每折必らず潔淨、作點尤
も精深、是以て雍容寬綽、畫として長からざるなし、後
人着意留筆せば、則ち駐鋒折穎の處、墨多く外に溢れ、
未だ法を備ふるに及ばずして、畫已に成る、故に舉止匆
遽、界恒に苦促し、畫恒に苦短なり。
張芑堂問て曰く、中鋒の説如何。梁同書曰く、筆を提げ



乳廟禮器碑 (後漢)

得て起さば、自然に中であるが、さりとして亦た、未だ嘗て側鋒を兼ね用ふる處無んばあらず、總て我が一縷の筆尖の爲めに使はるゝのである、斯くせば、中ならずと雖も亦た中なのである。近日江南の程易田が「通藝錄」の筆勢一條に、講じ得て最も精しい、前人の未だ曾て道ひ過ぎる所である。

又曰く、柳公權の「元祕塔碑」は、是れ極めて軟筆を以て寫した所で、米公が斥けて惡札と爲すのは、過ちである。筆が愈々軟かであれば、愈々掇り得て直に、提げ得て起たんことを要す、故に畫毎に起處に凝筆を用ひ、水旁の三點を作る毎に、末點は逆筆を用ひて踢起し、直鉤毎に、末の一束に至つて再び踢起し、下垂するものは、鍾乳の

如くである、然らざれば、畫は笏の如く、踢は斧の如く、鉤は枸株の如くなるであらう。柳公云ふ、心正しければ筆正しと、是は道學の語として看てはならぬ、正に是れ刻々把持するに、軟筆を以てせざるを得ざることを云つたものである、故に假りに米老をして、柳の筆を用ひしむるも、亦た必らず是の如くなるであらう。

又曰く、書家に燥鋒を渴筆と曰ひ、畫家に枯筆と曰ふことがあるが、これは判然同一でない、渴とは則ち潤はないことを云ふのであるが、枯とは死したことである、人々喜んで硬筆を用ふるが故に枯れる、若し羊毫を用ふるならば、左様なことはない。

十五 用筆の實例と結字

用筆が口訣に待つべきものであることは、既に承はり、又書法縦横の説をも聞くことを得たるが、匿さるゝもの見たきは、人情の常であれば、多くの弊害なき範圍に於て、これを示さるゝの方法なきか。

宋の徽宗の書に係れる金線書が、楊守敬の摹搨せる「鄰蘇園法帖」にある、是れ悉く用筆の法を外に現はして書いたもので、これを見れば、用筆の如何なるものかを知ることが出来る。

此の時鳴鶴翁は、徐ろに立つて、座右の書筐を開き、其中より、數帖の搨本を出して、或る一個所を披き、「唐太子率更令云々」の一頁を示して曰く、こは楊守敬が摹搨せる所の「鄰蘇園法帖」であるが、所謂用筆の意を、悉く形

に表はして書いた文字は、古來唯だ此の一通に限られて居る。筆者の名は記されて無いが、宋の徽宗皇帝だと傳へられて居る。表はすべからざるものを、形に表はして書いたのであるから、字體は固より變な風になつて居るが、之が用筆の奥義を遺憾なく示した所の、唯一の文字であるとするれば、また貴重なものと言はねばならぬ。併し大家の筆に成るものすら、此の通りである。況んや初學の徒が、漫りに之を傳へて、之を摸するに於てをや、其の病ひに罹るは、毫も怪しむに足らぬ、戒しむべきことである。

此の徽宗皇帝の書と云ふのは、方寸の楷書で、十行許あり、横畫の一の右端を下に抑へ、左に返へして、一の形

用筆を示して
遺憾なし

古碑の「永」字
八法に合は

をなし、豎畫の一の下端を右の上に返へして一の形をなすなど、書として之を見るときは、厭味の多い、妙味の少ないものであるが、此の百字許りに、用筆の秘訣が籠つて居ると思へば、尊重せずには居られない。序でに述べて置くが、古來運筆と云へば、直ちに永字八方を云々し、これを知らなくては、書は書けぬやうに云ふのであるが、併し古碑帖を開いて見るに、王羲之の書いたと云ふ「定武蘭亭叙」の永和九年の「永」の字は、所謂八方に稱はざるもの、如く、「鄭文公碑」永平四年の「永」の字、「爨龍顔碑」永慕立澤の「永」の字もまた其の通りである。是れ八方を示すの意がなかつた爲めでもあらうが、所謂永字八法が、古人に重んぜられざりしを知ることが出来る。

併しこれは名高いものであるから、書家として、一通りは知つて置く必要もあらう、それと共に、歐陽詢の結構に關する三十六法も、また参考として知つて置いて、差支ないと思ふから左に大要を掲げること、しよう。

(考)

永字八法

禁經に云ふ、八法は隸字の始めに起り、崔瑗、張芝、鍾繇、王羲之より以下、傳授する所、よく萬字を該ね、洵に墨道の最たり、隋僧智永、其の旨趣を發して、虞世南に授け、爾來書法傳授の一傳法として、彰かに存するに至れり。又云ふ、昔し逸少書を攻むる多歲、二十七年偏に永字を攻む、其の八法の勢を備へて、能く一切の字に

通ずるを以てなりと、八法とは、即ち側、勒、努、趯、策、掠、啄、磔これなり。



(二)側。側は其筆を平らかにするを得ず、鋒、右に向て、勢、左に向く、側とは平正ならざるの意にて、奇側險絶にして、高峰墜石の如くなるべし、もし險ならざるときは鈍に失す。

鈍なれば芒角隠れて、書の神格を喪ふ、其筆を側下し、墨精を暗墜せしめ、徐ろに反掲するときは、則ち稜利にして力あり。王右軍曰く、點を作るには皆磊々として、大石の衢に當るが如くなるべしと。

(二)勒。勒は其の筆を臥することを得ず、筆心を以て之を

壓す、筆未だ下さざる時は、先づ右より左に廻るの
 虚畫を作り、適宜の處に於て紙に落し、緊趨して進む、
 始めは平かに、中は仰ぎ、終は偃す、故に中間高くして、
 首尾少しく下る、而してよく澁勁なれば、則ち功成る、
 陳繹曾曰く、凡そ平畫は、算子の如きを忌む、終篇展玩
 して、一横畫を見ず、始めて是れ書法なりと、又衛夫人
 曰く、千里の陣雲の如く、隱々然として其の實形ありと、
 又平行直過は、之を平板と云ひ、書の病なりと、
 (三)努、努は其の筆を直にすることを得ず、直なるときは
 力なし、八法頌に曰く、努は直に過ぐるときは力敗ると、
 稍や曲勢を帯びて雄勁なるを貴ぶ、衛夫人曰く、千歳の
 古藤の如しと、直線を畫するが如きを忌むなり、



李翁西狹頌
 (後漢)

(四)趨。趨は挑ねんと欲して、また置く、其の鋒を蹲し、勢を得て出すを云ふ、率爾挑出を忌む。八法頌に曰く、趨は峻快にして錐の如しと。澁勁快利にして、鈍漫ならざるを要す。趨は努より出づ、努勢盡くる處これを挫刺し、其の利鋒刃の如くす、而も潛趨を貴ぶ、潛趨とは、趨出長大ならざるを云ふ。

(五)策。策は仰いで之を策し、鞭策の如くす、首尾高くして、中間少しく下る、努の反対なり。筆心仰擧するを策と云ひ、筆心下壓するを勒と云ふ、二の字を書するに、上畫は策にして、下畫は勒なり、策とは馬を鞭つが如きの勢ひを云ふ。

(六)掠。掠は拂掠なり、須らく其の鋒を迅にすべし、微曲

して下り、筆心卷處に至りて、末鋒を飛起するを云ふなり。掠は力の勻到を欲す、中途にして撤出すべからず、法、澁にして勁、意暢びんと欲して婉なるにあり、然れども徒らに婉媚を求めて、勁力これに稱はざれば、遂に緩滞に傷る。

啄法

(七)啄。啄は鳥の物を啄むが如し、まづ左より入り、迅擲してこれを急回す、輕勁にして淺浮ならず。筆力鐵石の如きを勝れりとす。

磔法

(八)磔。磔は徐ならず、疾ならず、筆を趨して戰行し、卷かんと欲して復た駐りて之を去る。王右軍曰く、一波を作る毎に、必らず三折して過ぐと、始め入趨、緊しく築して、微しく仰ぎ、便ち下る、徐行勢足りて、而して後

歐陽詢三十六法

排疊法

に之を磔す、磔は帛を裂くが如く、筆法の開張に譬ふ、遲澁にして、よく遒勁なるを、其の法を得たるものとす。

排疊

字は其排疊、疎密停勻、或は潤、或は狹なるべからざるを欲す、〔壽、葉、畫、寶、筆、麗、羸、夔〕の字、〔糸、旁、言旁〕の類の如し。

避就

密を避け疎に就き、險を避け易に就き、遠を避け近に就き、其彼此映帶して宜しきを得んとを欲す。

頂戴

字の上に承くるもの多し、惟だ上重下輕は、頂戴して

頂戴法

避就法

其勢ひを得んと欲す、[疊、壘、藥、鸞、驚、鷺、鬢、聲、醫]の類の如し。

穿插

字畫交錯する者は、其疎密長短、大小停勻を欲す、[中、弗、井、曲、册、兼、禹、禹、爽、爾、襄、角、耳、婁、由、垂、車、密]の類の如し。

向背

字に相向ふものあり、相背くものあり、各體勢あり、差錯すべからず、向は[卯、好、知、和]の類の如き是れなり。背は[北、兆、肥、根]の類の如き是れなり。

偏側

字の正しきもの固より多し、其偏側款斜する如き、亦

挑攙

た當さに其字勢結體に隨ふべし、偏に右に向ふものは、[心、戈、衣、幾]の類の如し、左に向ふものは、[夕、朋、乃、勿、少、廣]の類の如し、正若くは偏なるものは、[亥、女、父、互、文、不]の類の如し。

字の形勢は、須らく挑攙すべきものあり、[戈、弋、武、九、氣]の類の如く、又[獻、勵、散、斷]の字の如し、左邊既に多し、須らく右邊に之を攙するを得べし、[省、炙]の如し、上偏のものは、須らく下に之を攙するを得べし、相稱はしむるを善しと爲す。

相讓

字の左右、或は多く或は少し、須らく彼此相讓るべし、

方に善を盡くすと爲す、〔馬旁、糸旁、鳥旁〕の諸字の如き、須らく左邊は平直にすべし、然る後右邊字を作るべし、否らざれば、則ち妨礙して不便なり、〔繻〕字の如きは、中央言の字の上畫短かきを以て、兩糸を譲り出す、〔辦〕の字の如きは、中央の力の字、下に近きを以て、兩辛を譲り出す、〔鷗、鷗、馳〕の字の如き、兩旁俱に上狭くして下濶し、亦た是れ相讓るの意なり、又〔嗚呼〕の字の如く、口左に在るものは、宜しく上に近づくべし、〔和、扣〕の字、口右に在るものは、宜しく下に近づくべし、妨礙せざらしめ、然る後に佳と爲す、此の類是れなり。

補空法

補空

覆蓋法

覆蓋

〔我、哉〕の字の如き、點を作るに、須らく左邊寔處に對すべし、〔成、戟〕諸戈の字と同じかるべからず、〔襲、辟、餐、贍〕の類の如き、其四滿方正ならんを欲するなり、〔醴泉銘〕の〔建〕の字是れなり。

貼零法

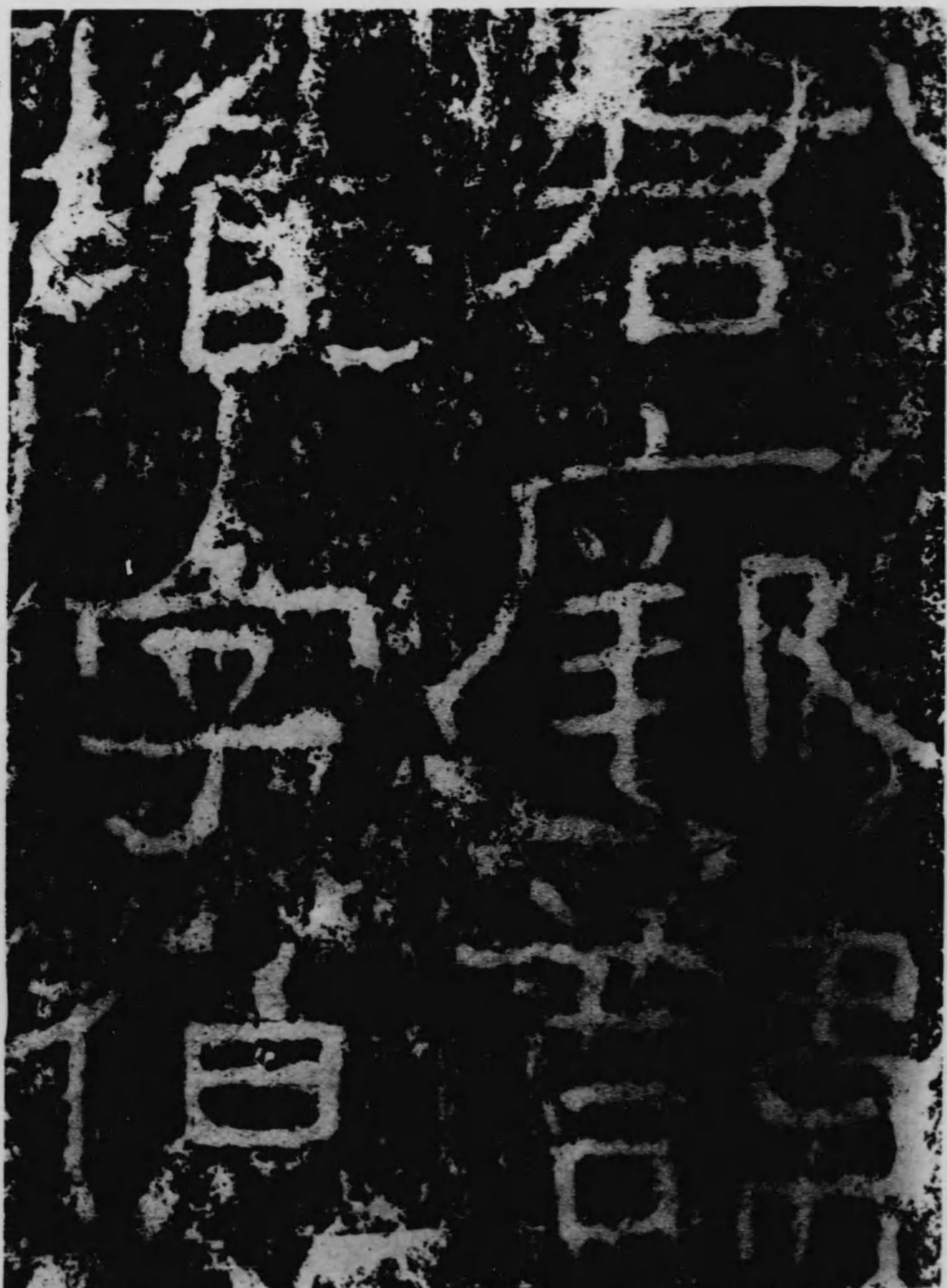
貼零

〔令、今、冬、寒〕の類の如き是れなり。

黏合法

黏合

字の本と相離開するは、即ち黏合せんと欲す、相著け



捷速法

顧掛せしめて乃ち佳なり、諸偏旁の字、六〇「臥、鑿、非、門」の類の如き是れなり。

捷速

「風、鳳」の類の如き、兩邊速かに宜しく圓擗すべし、筆を用ふる時、左邊の勢ひ宜しく疾はやかるべし、筆に背むく時、意中電の如しと是れなり。

滿不要虛

滿にして虚を要せず。

「園、圃、圖、國、回、包、南、隔、目、四、勾」の如き是れなり。

意連法

意連

字に形斷つて而して意連るものあり、「之、以、心、必、小、川、州、水、求」の類の如き是れなり。

覆冒

字の上大なるものは、必らず其下を覆冒す、〔雨頭、穴頭、灬、然頭、奢、金、食、彡、巷、秦〕の類の如き是れなり。

垂曳

垂は、〔卿、郷、都、卯、彡〕の類の如く、曳は、〔水、支、欠、皮、更、彡、走、民、也〕の類の如き是れなり。〔曳は徐なり、引なり、牽なり、拽に同じ〕

借換

〔禮泉銘〕の〔祕〕の字の如く、示の字の右點に就て、必の字の左點を作る、此れ借換なり。又〔靈〕の字を法帖中に、或は〔靈〕に作る如き、亦た借換なり。又〔蘇〕を〔蓀〕と爲し、

〔秋〕を〔𤇀〕と爲し、〔鵝〕を〔鵞〕と爲し、〔鶯〕と爲す類の如き、其字結體し難しと爲す、故に互換すること此の如し、亦た借換なり、謂はゆる東映西帶是れなり。

増減法

増減

文の結體し難きものあれば、或は筆畫の少きに因りて増添し、或は筆畫の多きに因りて減省す、〔新〕の〔新〕たり、〔建〕の〔建〕たり、〔辛〕の〔辛〕たり、〔曹〕の〔曹〕たるが如き、體勢茂密ならんを欲す、古字の當さに如何ともすべからざるに非ざるなり。

應副法

應副

字の點畫、稀少なるものは、其彼此相映帶せんことを欲す、故に必らず應副相稱ふを得、而る後に可なり、

撐柱法

撐柱

又〔龍〕詩、〔讐〕轉の類の如き、必らず一畫は一畫に對し、相應ずる亦た相副ふなり。

字の獨立するものは、必らず撐柱を得、然る後に勁建觀るべし、〔丁〕亭、手、亨、寧、于、矛、予、可、司、弓、永、下、卉、草、巾、干の類の如き是れなり。

朝揖法

朝揖

凡そ字の偏旁あるものは、皆相顧みんことを欲す、兩文にして字を成すもの多しと爲す、〔鄒〕謝、鋤、儲の類の如し、三體にして字を成すもの、〔讐〕斑の類の如きは、尤も相朝揖せんことを欲す、八訣に謂はゆる迎へて相顧指する是れなり。

救應

凡そ字を作り、一筆纔かに落ちて、便ち當さに第二三筆、如何か救應し。如何か結裏せんと思ふべし。書法に謂はゆる、意は筆先に在り、文は心後に居る是れなり。

附麗

字の形體、宜しく相附近すべきものあり、相離るべからず、〔影〕形、和、起、超、欽、勉の如し、凡そ〔文〕欠の旁ある者の類は、小を以て大に附し、少を以て多に附するの意なり。

回抱

回抱して左に向ふ者は、〔曷〕 丐、 易、 躬の類の如く、

包裹

右に向ふ者は、〔良〕 鬼、 包、 旭、 它の類の如き、是れなり。

小成大

〔園〕 圃、 打、 圈の類の如きを謂ふ、四圍包裹するなり、〔尙〕 向は、上、下を包み、〔幽〕 凶は、下、上を包み、〔匱〕 匡は、左、右を包み、〔旬〕 旬は、右、左を包むの類是れなり。

字、大を以て小を成す者は、〔冂〕 𠂔の如く、下大なる者これなり、小を以て大を成す者は、則ち字の成形其小を極む、故に之を小、大を成すと云ふ、〔孤〕の字の如きは、只だ最後の一捺に在り、〔寧〕の字は、只だ最後の

一丁に在り、[欠]の字は、只だ末後の一點に在るの類是れなり。

小大成形

小字、大字、各々形勢あるを謂ふなり。東坡先生曰く、大字は結密にして而して間なきに難んず、小字は、寛綽にして而して餘りあるに難んず、若し能く大字結密、小字寛綽なれば、則ち善を盡し美を盡す。

小大大小

書法に曰く、大字は促めて小ならしめ、小字は放つて大ならしめ、自然に寛猛の宜しきを得。譬へば[日]の字の小なるが如き、[國]の字と同じく大にし難し、[二]の字、[一]の字の疎なる如き、亦た字畫の密なる者と相間らん

各自成形

と欲す、必らず當さに位置排布する所以を思ふべし、相映帶せしむること宜しきを得て、然る後ちに上と爲す。或は曰く、上小下大、上大下小、其相稱はんことを欲すと、亦た一説なり、

相管領

凡そ字を寫す、其合して一字と爲らんことを欲す、亦た好し、分つて體を異にするも亦た好し、其能く各自形を成すに由る故なり。

應接

其の彼此顧盼し、位置を失はざらんを欲す、上は下を覆はんと欲し、下は上を承けんと欲す、左右亦た然り。



編法

左小右大法

字の點畫は、其互に相應接せんことを欲す、兩點は、
〔小、八、丩〕の自から相應接するが如し、三點は、〔糸〕は
則ち左は右に朝し、中は上に朝し、右は左に朝する如
し、四點は〔然、無〕の二字の如く、則ち兩旁、兩點、相
應じ、中間相接す、又〔心〕を作るも、亦た相應接す、〔丿、
レ〕水、木、州の類に至りても、亦た然り。

編

歐の筆を學ぶ者は、字を作りて狹長なり易し、故に此
法は、其結束整齊、收斂緊密、排疊次第あるを欲す、
則ち老氣あり、此れ編たるを貴ぶ所以なり。

左小右大

此一節は、乃ち字の病、左右大小、其相停まららんとを

左高右低、左
短右長法

卻好法

欲す、人の字を結ぶ、左小にして而して右大なり易し、
故に此れ下の二節と其病を著すなり。

左高右低、左短右長

此二節は、皆字の病なり、左高右低なるべからず、是
を單肩と謂ふ、左短右長は、八訣に謂はゆる左短右長
ならしむる勿れと、是れなり。

卻好

其包裹鬪湊、失勢を致さず、結束停當、皆其宜しきを
得るなり。

歐陽詢曰く、意、筆前に在り、文は思後に向ふ、分間
布白、偏側ならしむる勿れ、墨淡ければ則ち神彩を傷
る、絶だ濃ければ、必らず鋒毫を滯す、肥ゆれば則ち

鈍と爲り、瘦すれば則ち露骨なり、軟弱に傷らしむる勿れ、須らく怒降奇を爲すべからず、四面停勻、八邊俱に備はり、短長度に合し、蠡細中を折し、心眼程に準じ、疎密欵正、筋骨精神、其大小に隨ひ、頭軽く尾重かるべからず、左短かく右長からしむる無れ、斜正人の如く、上稱ひ下載せ、東映西帶、氣宇融和、精神灑落、此微言を省せば、誰か不可と爲さん。

包正臣曰く、結字は用筆に本く、古人の用筆は、悉く是れ峻落反收、則ち結字自然に奇縦なり、若し吳興(趙子昂)が平順の筆を以て、而して山陰(王羲之)が矯變の勢を運らさば、則ち字を成さず、分行布白とは、停勻の説に非ざるなり、端しきこと、引繩の如きを以て、章法に深しと

結字は用筆に
基く

爲す如きは、此れ則ち史匠の能事のみ。

十六 碑版を學べ

書を學ぶには、如何なる手本を選ぶべきかとは、先づ何人にも起り來る問題で、古來これに對しては、直ちに古法帖を學べと答へたものであるが、近來碑學が盛んになつたので、法帖よりは、碑版を學んだ方が宜いと云ふ説が、稍や勢力を占めて來たらしい、而して世の帖學派と、碑學派とは、互に主張を争つて居るのであるが、これに就ては、如何なる方針を取るべきか。

文字は、金石に刻まれたる、原刻舊拓のものを選んで、これを學ぶべきである。

金石の金は、古銅器の類を指し、石は無論碑碣の類を云

金石の原刻舊
拓を學べ

ふのであるが、遠く古代に逆つて、古籀文を研究するに
 は、是非とも古銅器の銘などに據らなければならぬが、
 篆隸以下のものは、權量碑碣等に存して居るから、それ
 を學べば宜しい、併し碑碣の類には、再建三建と云ふ風
 に、原碑を摹刻して、後世に建てたものが少なくないか
 ら、特に原碑を選ぶ必要があり、同じ原碑でも、風雨幾
 世霜、擗拓幾千萬回を経て、字面の磨泐したものでは、
 また古人の筆意を知ることが出来ない、そこで舊拓のも
 のを擇べと云ふのである。然るに有名な石碑になると、
 其の原刻舊拓は、非常に数が少ないのみならず、又其の
 價が、非常に高いので、逆も一般の學者が、これを得る
 譯には往かない、然るに近來寫眞版の發明以來、名家の

珍藏に係れる原刻舊拓を、寫眞版に附して印刷し、これ
 を比較的廉價に賣ることゝなつたので、殊の外便利を得
 る次第である。尤も寫眞版に取つても、印刷の際、イン
 キ或は刷り工合に由つて、多少の相違を生じないとも限
 らぬが、成るべく印刷の鮮明なものを選べば、此の缺點
 は至つて少なからうと思はれる。

扱て碑版の學ばざるべからざること就て、鳴鶴翁は、
 屢々人に語られたのであるが、其の中にて、嘗て雜誌「書
 道及畫道」の記者に語られたるもの、及び翁の「學書經
 歴談」に掲げられたるものを、取括んで述べると、大要
 左の如くである。

「第一は、生きた字を學ぶべしと云ふことである、其の裏

を云へば、死んだ字を習うては、駄目だと云ふ意味で、古の名家の書いた肉筆があれば、これに増したものはない、併しそれは容易に得られないとすれば、碑版の字が、善いとする外はない、貫名先生は、多く歴代の碑帖を収集し、其の考證に委しい人であつたが、集帖を好まずして、主として原碑に力を用ひられたと云ふのは、集帖は幾度か翻刻せられ、古人の精神、形似、共に失ふたものが多くて、到底信を置かれない、大體に於て、死んだ字である、碑版の字も、生きた字とは云はれないが、法帖に比べて見れば、碑版の方は、千百年を経ると雖も、古人の眞蹟を直ちに石に刻し、謂はゞ紙一枚の死方であつて、磨泐の餘りではあるけれども、精神が未だ全く盡き

て居らぬから、打もたれて學ぶに足るからである云々。

十七 名家の劇蹟を参照せよ

書學者が、碑版を重んじて、これを學ばねばならぬことは、誠に其の通りである、然るに碑を學ぶものにも、亦た弊が無いとは謂はれない、其の譯は、碑は紙を離るゝこと、僅かに一幕の差ではあるが、如何に巧みでも、石に刻したのと、紙に書いたのとは、自づから異なる所もあり、又幾千萬年の間、風雨に晒されたので、自然磨泐した所もあるから、唯だそれのみを學んだのでは、まだ物足らぬ所があるらしい、碑版の弊を避くるの一方として、如何なることを力むべきか。

我國千年以前の名家の劇蹟を取つて、支那古代の碑版と、

比較研究し、又畧ぼ同時代に於ける、經生の古寫經に就て、點畫の法を學はゞ、啓發する所、少くないであらう。

此の事に就ても、鳴鶴翁は、嘗て左の如く語られたことがある。

「併し碑版もまた、一方から云へば、死んだ文字なので、それにのみ依頼して居つては、是また到底立派な字は書けぬ、そこで空海や、橘逸勢、道風、佐理、行成等の如き、我國千年以前の眞蹟で、唐の名家にも劣らぬものが、今尙ほ存在して居るから、これと前に謂つた碑版とを、彼此れ並べ觀、合せ考へて、書を學ぶが善いと云ふのである。

次は、古寫經に就て、點畫を學ぶべしと云ふのである。



天發神識碑 (吳)

古寫經と云へば、和銅天平年代より、弘仁天皇前後に至る、經生の筆寫になるものであるが、弘法大師が、昔し支那に渡つて學んで來た所の、唐代の字の書き方が、流れ傳つて、多少の變化はありとするも、傳へ傳へて、一脈の生氣が存して居るものと見るべきである、即ち寫經は、生きて居る字である故に、寫經に就て、點畫を研究するが善いと云ふのである〔書道及畫道、學書經歴談〕

尙ほ翁の著はされたる「論書三十首」に掲げられたる、三代以後隋に至るまでの、金石及び眞蹟に係るもの、題目を左に記載して、讀者の參考に供すること、しよう。

鐘鼎彝器銘

(三代)

古籀

微子鼎

(同)

同

石鼓殘字 (同) 古籀
 瑯琊臺碑 (秦) 篆
 五權銘 (同) 同
 五鳳碑 (前漢) 隸
 萊子侯封田刻石 (同) 同
 開通褒余道碑 (後漢) 同
 漢元初三公山碑 (同) 篆隸
 敦煌太守裴岑紀功碑 (同) 隸
 楊孟文石門頌 (同) 同
 孔廟禮器碑 (同) 同
 郭林宗碑 (同) 同
 李翁西狹頌 (同) 同

漢石經殘本 (同) 同
 郃陽十三殘字碑(又云魏黃初殘碑) (三國) 同
 天發神讖碑(又云吳天璽紀功碑) (同) 篆
 爨寶子碑 (晉) 楷
 石門磨崖詩碑 (宋) 同
 爨龍顏碑 (同) 同
 瘞鶴銘 (梁) 同
 雲峰山、天柱山碑 (魏) 同
 司馬景和妻孟敬訓墓誌銘 (同) 同
 龍門造像二十種 (同) 同

張猛龍碑	(魏)	楷
馬鳴寺根法師碑	(同)	同
菩薩處胎經	(同)	同
泰山佛經磨厓碑	(同)	同
啓法寺碑	(隋)	同
龍藏寺碑	(同)	同

十八 方筆と圓筆

近來或る一派の人々の中には、頻りに方筆論を主張し、六朝以前の文字は、悉く方筆であつたかの如くに説き、方筆にあらざるものは俗となし、甚しきは方筆にあらざれば、字で無いと云ふ位ゐに、方筆の難有味を並べ立てる人がある、されど余の聞く所に依れば、方圓の差は、

方圓の差は篆隸の相違に基

篆は圓勁、隸は方勁

もと篆隸の相違から起つたもので、方筆のみを、書道の眞訣の如くに云ふのは、聊か受取り兼ねるやうに思はる、如何。

篆は圓勁古雅、隸は方勁古拙を以て極致と爲す。

方筆とは、讀んで字の如く、筆を四角に使い、文字の角に、圓味を帶ばしめないことで、古來隸書には、皆この法を用ひて居る、これに反して圓筆とは、文字に圓味を帶ばしむるとで、古來篆書には、皆この法を用ひて居るので、漢隸の後ちを承けた所の六朝の楷書に、方筆を用ひたものゝ多きことは、當然の次第である、然るに康有爲が、「廣藝舟雙楫」を著はして、圓筆は云々、方筆は云々と、方筆のことを、如何にも、自分の專賣特許でもある

康有爲の餘論

如くに云ひ觸らし、これを讀んだ人々は、書道の新知識を得たと誤信して、盛んに吹聴した所から、方筆は遂に六朝のものに限られたるが如くに、世間では謂つて居るが、安んぞ知らん、方筆は、隸書に於て、當然あるべき用筆法であつて、隸書から楷書に移るには、必らず方筆を使用する所あるも、また毫も怪しむに足らぬのである。されば方筆を以て楷書を書くこととは、隸書の筆法を楷書に應用すると云ふに過ぎないのであるが、更に一步を進めて云へば、方筆で書いた楷書だから善い、方筆を用ひないから悪いと云ふやうなことは、少しも理窟に合はない、現に包世臣の如きも、鄭道昭の楷書を稱して、**「篆勢、分韻、草情畢く具はる」と**讚歎した程で、妙は此の

畢く具はる所に在ると謂はねばならぬではないか。扱て此の**「圓勁古雅、方勁古拙」と**云ふことは、鳴鶴翁が、支那漫遊の際、蘇州に到りて吳大澂に交り、殷周秦漢の古器銘を多く見るを得て、三千年外大小篆の高妙を窺ひ又當時隸書を以て盛名を博して居た楊見山に遇つて、漢隸の法度を聞かれた時に、悟られた言辭であることは、**「學書經歷談」**にも、記載してある通りで、尙ほこれと同じに、**「唐隸明隸の、判然途を殊にして、學ぶに足らざること、又從來我邦人の篆隸に、一も古法なく、皆優孟の衣冠なることをも看破し、深く自ら戒しむべき所以を知られた」と**云ふことである。

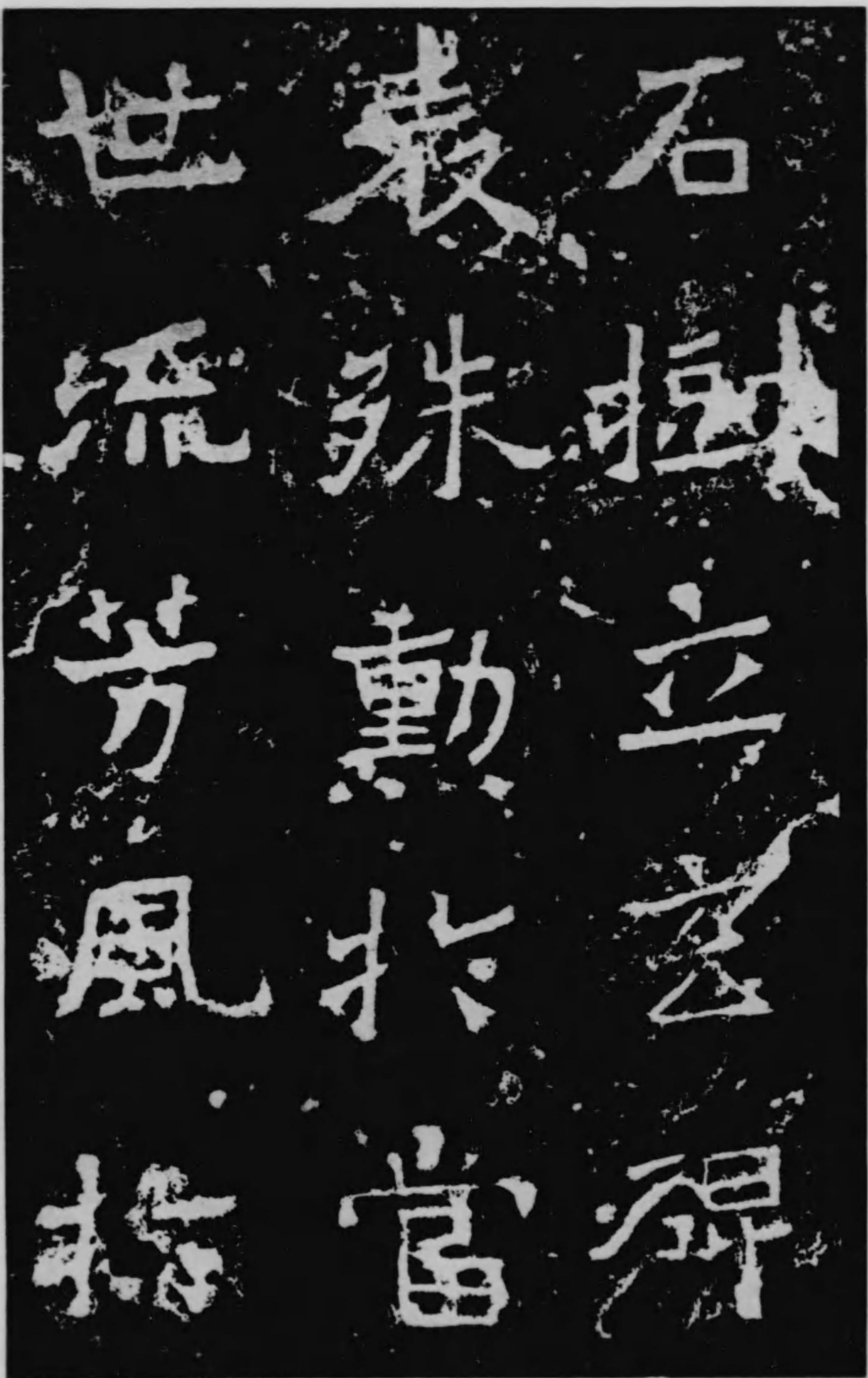
(考)

楊峴(清人)

名は峴、見山と號す、上海の人、近代に於ての隸書の名人で、學者であるが、其家を訪ねて見ると、柱聯偏額、概ね自ら隸書を以て之を書して居る程で、以て其の抱負を窺ふことが出来る、楊守敬は「見山は禮器を學んで、信に能者たり、晩年流れて頽唐と爲る、款題の行書は、尤も俗格たり」と評して居る。

十九 手本を選ぶの標準

問て曰く、古籀、篆、隸、楷、行、草とも、其の發達には、それ／＼の時代があるが、唐以後に到つては、各體とも具はらざるなく、博く涉つて、完全を期するには、何れも知つて居るに、越したることは無いかも知れぬが、



曇龍顏碑 (晉)

手本を選ぶ標準

手本は三代より初唐まで

古籀は三代

篆隸は秦漢

各體ともに、何れの時代のものより、其の手本を選ぶことが適當ならんかとは、單に初學の人のみならず、稍や進んだ人と雖も、また迷ふ所なきにあらざるべし如何。古籀は三代、篆隸は秦漢、楷、行、草は、六朝より初唐までを主とすべしと雖も、また古今を通じて、衆長を兼有するの雅量あるを要す。

古籀は、三代以後には殆んど無い、偶々あるものは、多くは摸寫に過ぎないから、これは謂ふまでもなく三代で無くてはならぬ。篆書は無論秦のものが一番宜しいが、不幸にして、秦時の碑刻は、殆んど絶滅に歸したので、權量、詔版等の金屬に刻まれたものは、残つて居るが、これだけでは十分でない、そこで漢の時代になつてから

も、間々立派な篆書の碑刻に残つて居るものがあるから、それをも合せ學んだならば、宜しからうと云ふのである。隸書は言ふ迄もなく漢のもので、前漢には碑刻が少ないけれども、後漢には随分澤山あるから、少しも不十分を感じない。楷書は六朝、殊に北魏の碑刻中に好いものが多く、初唐の大家にも、また大に學ぶべき所がある、行草は、王羲之、王獻之、其の他「淳化帖」を始め、各種の集帖に收められたるものも少なくないが、確かなものとしては、唐に待つ所がなくてはならぬ、殊に顔真卿の三稿の如きは、重要なものであらう。併しまた篆書に於ても唐の李陽氷、更に時代を隔て、清の鄧石如の如き名家が、突如として起ることもあり、明代は行草に巧み

にして、清代は篆隸に長じたものと云ふ風に、其の時代々々の風潮に因つて、特長なしとも限られぬから、假令時代は降つても、取るべきものあれば、これを取るのが、學者の本分であらう。それに就て、鳴鶴翁は又、「學書經歷談」に、「支那歴代の書を通觀するに、概して今は古に及ばざるの傾きは有りますが、去なから、元來人の能力に於て、古今甚しき懸隔のある筈はありません、近人と雖も、一代の名手とも稱す可き人々には、皆古人にも左まで劣らぬ長所がある、故に書を學ぶには、甚しく古今を軒輊せず、衆長を兼有するの度量が無くてはなりません」と書いてある。今翁の説に隨ひ、参考の爲め、左に各體の手本と爲すべきもの數種づゝを記して見よう。

古籀

古籀

篆書

篆書

泰山殘字

權器銘

嵩嶽三闕銘

吳天璽紀功碑

怡亭銘(李陽冰)

隸書

隸書

孔廟禮器碑

開通褒余道碑

元初三公山碑

西狹頌

鄭固碑

石門頌

楷書

楷書

鄭文公碑

(鄭道昭)

行書

行書

聖教序

(王羲之)

瘞鶴銘

爨龍顏碑

張猛龍碑

廟堂碑

(虞世南)

醴泉銘

(歐陽詢)

化度寺碑

同

雁塔聖教序

(褚遂良)

孟法師碑

同

宋璟碑

(顏真卿)

麻始仙壇記

同

草書

- 蘭亭叙 同
- 汝南公主碑 (虞世南)
- 雲麾將軍碑 (李邕)
- 麓山寺碑 同
- 爭坐位帖 (顏真卿)
- 祭姪帖 同
- 祭伯父帖 同
- 草書
- 十七帖 (王羲之)
- 千字文 (智永)
- 書譜 (孫過庭)
- 千字文 (懷素)

集帖にては、「餘清齋帖」を以て比較的嗜好なりとす。

(考)

楊守敬曰く、國朝(清)の行草は明代に及ばず、而も篆分は則ち前代を超軼てし、漢人に直接す、鄧完白、楊沂孫の篆書、桂馥、陳鴻壽、黃易之の分書の如き、皆古先に原本して、自ら機杼を出す、未だ時代を以て降すべからず。

二十 多見多寫

問て曰く、書を學ぶに、一家を主とせば、狹窄に失するの病あり、同時に諸家に互れば、汎濫に失して得る所なきが如し、古人亦た各々主とする所あるものゝ如し、初學書を學ばんと欲せば、宜しく如何なる順序を取りて可なるべきか。

一家より諸家に及ぶ

博渉の實例

書を學ぶには、自己の性情に、最も近き所の一家より始め、漸次に博く諸家に及ぶべし。

先づ數多の有名なる碑帖を閲し、其中より、自分の最も好む所の字體を選びて、それから習ひ始め、其れを終つたならば、更に他の帖に移り、甲乙丙丁、一家に起つて遂に諸家に通ずる譯になるのであるが、口でこそ斯く云へど、實際に於ては、なかくさう容易く出来るものではない。

例へば顏真卿の「宋璟碑」を選んだとする、之を學ぶには、別に説いてある臨摹の法を用ひ、一點一畫、一字一行、斯くて「宋璟碑」が悉く手と頭とに入つたならば、更に他の帖、即ち顏は褚から出たのであるから、褚遂良に移り、

黃庭經

上在黃庭下有關元前有幽闕後有命窟
八丹田密能行之可長存黃庭中人
而扉幽闕佚之馬魏、丹田之中精氣微
主肥靈根堅志不衰中池有士、
木相距重閉之神廬之中務脩治玄靡氣管

王羲之黃庭經（晉）

褚遂良の「雁塔聖教序」か、「孟法師碑」かを學び、それを終りたらば、歐陽詢に移ると云ふやうに進んで往くのであるが、「宋璟碑」一帖でも、眞面目に之を研究することになれば、幾多の日子と、幾多の精力とを要し、ちよつくら鳥渡には、此の一帖を手に入れることすら、六ヶ敷い、若しも餘り悠々と、此の一帖にのみ力を注いで居ると、それが爲めに日が暮れて、他の帖に移るの暇が無いやうなことになるから、斯に於て更に一の便法を講じなければならぬ必要が起り、而して此必要を充すに足るだけの便法も、亦た發見されて居る。

それは外でもない、何れの帖にでも、其の中で、特に自分の好きな所があるものであるから、其の好きな所を、

二十字位も、繰返し〜て練習すると、字数が少ないから、割合に早く覚えられる。併し字の畫は、凡そ極つたものであつて、其の二十字の内に、大抵なことは含まれて居るから、それだけを充分に研究したならば、餘はざつと習つて仕舞ふのである。斯くして最初の一帖、例へば顔真卿の「宋璟碑」の要領を得れば、次は褚遂良の「聖教序」に移り、前と同じ方法を以て、これも亦た習ひ終り、更に進んで、歐陽詢の「醴泉銘」に移り、同じ方法で、これも習ひ終つたとすれば、斯に此の三家の比較研究を始め、乃ち顔の横畫と褚のとは、何處は同じだが、何處が違ふとか、歐に至つては、何處は異つて居るが、何處は同じて居るとか云ふ風に、次第々々に點畫扁旁を辿り、他の

碑帖に移るやうにすれば、遂に各家の長を取つて、これを我が物とすることが出来、此に自ら一家を成すに至るのであるが、言ふは易くして行ふは難く、若しも最初から粗末な習ひ方をして、顔真卿が何う云ふ風であつたか、褚遂良は何うであつたか、習ふことは習つたが、覚えて居らぬと云ふことであつては、幾ら澤山な碑帖に涉つても、それは習つたと云ふ名ばかりで、實際には何の益をもしないことになる。要するに書は、精熟が第一であるから、急いでは、決して成功するものではない。そこで古人の一例として、鳴鶴翁の私淑されたと云ふ貫名菘翁は、どんな手本を祕藏して居たかと云ふことに就て、翁は左の如く語つて居られる。

『義之の十七帖、蘭亭、孫過庭の書譜、子昂の千字文』などであつた。一體貫名と云ふ人は、非常な精力家であつて、嘗て山東直砥氏の語る所に依れば、貫名が高野山の寺院に寓して居た時分には、あらゆる漢籍を通覽し、而も悉く書入れをしたものであつたと云ふことである。斯る有様であつて、其の書に於けるも、亦た刻苦精到せざるはなしと云ふ風で、子昂の『千字文』などで、能くあの内より、あゝいふ書風を學び上げたものと感服の外はない。貫名の書で、余が所藏して居るもの、中に、『二十二史劄記序文』の草稿がある。版刻された同書の序文は、貫名の書いたものを、其の儘刻したものであるが、あれよりも此の原稿の方が、更に面白く出來て居る。何人の筆か判

感翁六たび碑
稿を改む

好む所は投契
し易し

明せぬが、朱書で添削の書入がしてある。(書道及書道)又嘗て編者が翁の所にて見た菘翁の眞蹟中に、江州岡之莊の人松井某の碑文の稿本があつた。然もそれが翁の所藏となつて居るものばかりでも三通あり、外に尙ほ二通乃ち清書の分ともに六通あつて、時に年八十三と云ふに至つては、如何にも感服の外なく、翁も頻りにこれを歎稱して居られたが、名家の苦心は、實に想像の外である。

(考)

梁同書曰く、凡そ人は、心の好む所に遇へば、最も投契し易いものである。古帖は、晋唐宋元を論ぜず、皆な書聖に淵源して居るとは云へ、各自の面貌と、各自の精神意度とは、人の取る所に隨ふこと、宛も蜂子が花を采り、

鶯王が乳を擇ぶやうなもので、其の一支半體を得て、心に融會すれば、皆な我が用となる。然るに若しも専ら臨摹を事として、泛く愛するならば、則ち情篤からず、さればとて、意を一家にのみ着くるならば、則ち又膠滯する、所謂琴瑟の專一なるは、五味和調の妙たるに如かす。我の心を以て、古人に迎合することは易いが、古人の法を以て、我を束縛することは難い、此の理が明かであれば、何れを先と爲し、何れを後として可いかは、明らかにし易いであらう。

又曰く、前人が専ら閣帖を學ぶのは、其の最初の本たるが爲めで、尤もな次第である、然し我輩の見る所は、一翻再翻、幾たびか翻刻を重ねたもので、最初の面目はな

二十一 臨帖の要事

問て曰く、書を學ぶものは、須らく古帖を臨摹すべしとは、古來動かす可らざる法則の如く、臨とは古帖を視て字を寫し、摹とは古帖の上に紙を置き、之を透き寫しするものと聞いて居る。

然るに又聞く所に依れば、臨摹の意義、今と古とは同じからず、今は見て書くことを臨と云ひ、紙を上において透寫透寫しすることを摹といふことになつて居るが、古へは本を見て書くのが摹で、透寫透寫しすることをば、搨搨と云つたもので、古帖に、王摹だの、褚摹だのとあるのは、見て書いたのであつて、透寫透寫してはない、故に人に由ては、

今でも其の意味に摹の字を使つて居るものもあつて、稍や混雜を免れぬのであるが、それは名稱の相違で、何れでも宜いとして、摹寫には、輪廓を取つて、後から填墨するものと、初めから本の通りに書くものとの二つがある、何れも今の所謂摹寫、古の所謂搨法である、此の摹寫は、古人も謂て居る通り、文字の形を覺えるには、至極便利で、早く覺えられるが、其の代りに又忘れ易きのみならず、筆力を長ぜしめて、眞に能書たらんとするには、是非とも臨寫に努めなければならぬこと、思はるゝが、扱て古帖を臨するに當りて、古人の性情を會得すべきは、言ふ迄もなきことなれども、其の文字の形質をも似するに非ざれば、眞に其の書を學び得たりとは云ひ難

蘭亭叙唐臨絹本

永和九年歲

暮春之初會

于會

契事

からんか。然るに梁同書は曰く、「好んで古帖を摹するは、何を以て反て大病と云ふ。之を要するに臨寫の時に當りて、手は紙に在り、眼は帖に在り、心は則ち帖と紙との間に往來す、如何で佳なることを得ん、縦ひ逼肖するも、亦是れ耳目あつて、氣息無きの死人の_み、臨摹すること既に久しきに至つて、成見胸に在るも、偶々揮灑せんと欲せば、反て自主なること能はずと、此の言果して眞なりとせば、如何なる臨帖の法を用ひたならば、害無くして、功を收むること多かるべきか。

臨帖の法は自家の性情を以て、古人の神理に合せしむるを主とし、形似に屑々たるべからず。臨摹を廢して、別に文字を習ふの法あることなく、隨て書に志しあるものは、何

よりも先づ臨摹に努めなくてはならぬ。但し力を得ること最も多きは、前にも云ふ通り臨寫に在るのだから、決して之を怠つてはならぬが、其の方法に於ては、特に注意せねばならぬ點がある。此に梁同書の云ふが如く、手は紙に在り、眼は帖に在り、心は則ち帖と紙との間に往來すと云ふが如き臨摹の方法は、一點一畫、手本の通りに書かうとすると、斯うなるので、大抵な人の多く陥り易い弊害である。即ち帖の一點を看ては、紙に一點を寫し、寫し終れば更に帖の一畫を看て、更に紙に一畫を寫す、それが爲めに、頭は絶えず左に振り、右に振り、眼も亦た、左視右顧して定まらざるを云ふので、此方法を取る時は、手本には似易いが、所謂、耳目あつて氣息無きの死人となるから、斯る臨

常人の陥る易き弊害

看帖の要訣

寫の方法を取つてはならぬ。

然らば如何なる方法を取るべきか、先づ習はんとする帖の文字を、一點一畫、細密なる注意を拂つて、之を熟視し、眼と心とに、充分之を記憶する、是れ看帖の要訣であつて、然る後、眼を帖より放して紙に移し、其の記憶したる文字を、記憶のまま、紙に書くのである、初めはなか／＼記憶が出来ないから、帖とは違つた字が出来るかも知れない、違つても構はぬから、其の一字を書き終るまでは、決して帖を看てはならぬ、斯の如くにして段々熟練を積んで往けば、眼に古人の字を記憶すると同時に、手に古人の字を寫し得るの技能を有するやうになり、一字々々此の方法に依つて、次第に臨寫し、數字或を數十字に達した頃、帖を伏せて、

臨寫の要訣

其の數字或は數十字を背臨する。此法を反覆熟練するならば、音に病を生ぜざるのみならず、遂に能く妙所に上達することが出来るのである。臨摹の方法如何は、習字の上にて、手本を選ぶと共に、最も大切なる事柄であるから、特に注意せねばならぬ。

支那人習字の方法

雙鉤文字を塗ること

序に、近時に於ける支那人の習字の方法を参考の爲め述べて置きたいと思ふが、彼等が字を習ふには、なか／＼能く順序を立て、居る、即ち一番初めは雙鉤字の中を塗ること、それに使用する所の、雙鉤字の双紙が出来て居る。例へば「一」の字を書くには、「一」の字の雙鉤字があつて、其の中に點線を施し、また丸い印が附いて居る、其の紙を買つて来て、子供にそれを塗らせる、其の塗る

文字の上を摹すること



順序は、點線の示すがまゝに、筆を進めて行き、丸い印のある所では、特に力を入れるやうにする、圖に掲ぐる所に依つて云へば、初めイの所から筆を起し、ロの所に力を入れ、更にハの所で押へ、ニの所の方へ遁げさせると云ふ風に、これを手初めとして、次には跳ねる所や、四角を崩したものが、雙鉤字になつて居て、それを幾遍も／＼習ふのである、斯うすれば自然に筆の使ひ工合が解つて来る、次には、赤い字や、青い字で書いた、手本を草紙と兼體のやうなものがあつて、其の上をまた、幾十百遍となく習はせ、更に師匠の書いた、大きな文字に、油紙を被うて、其の上を摹らせ、前に覺えた運筆法を用ひて、此の

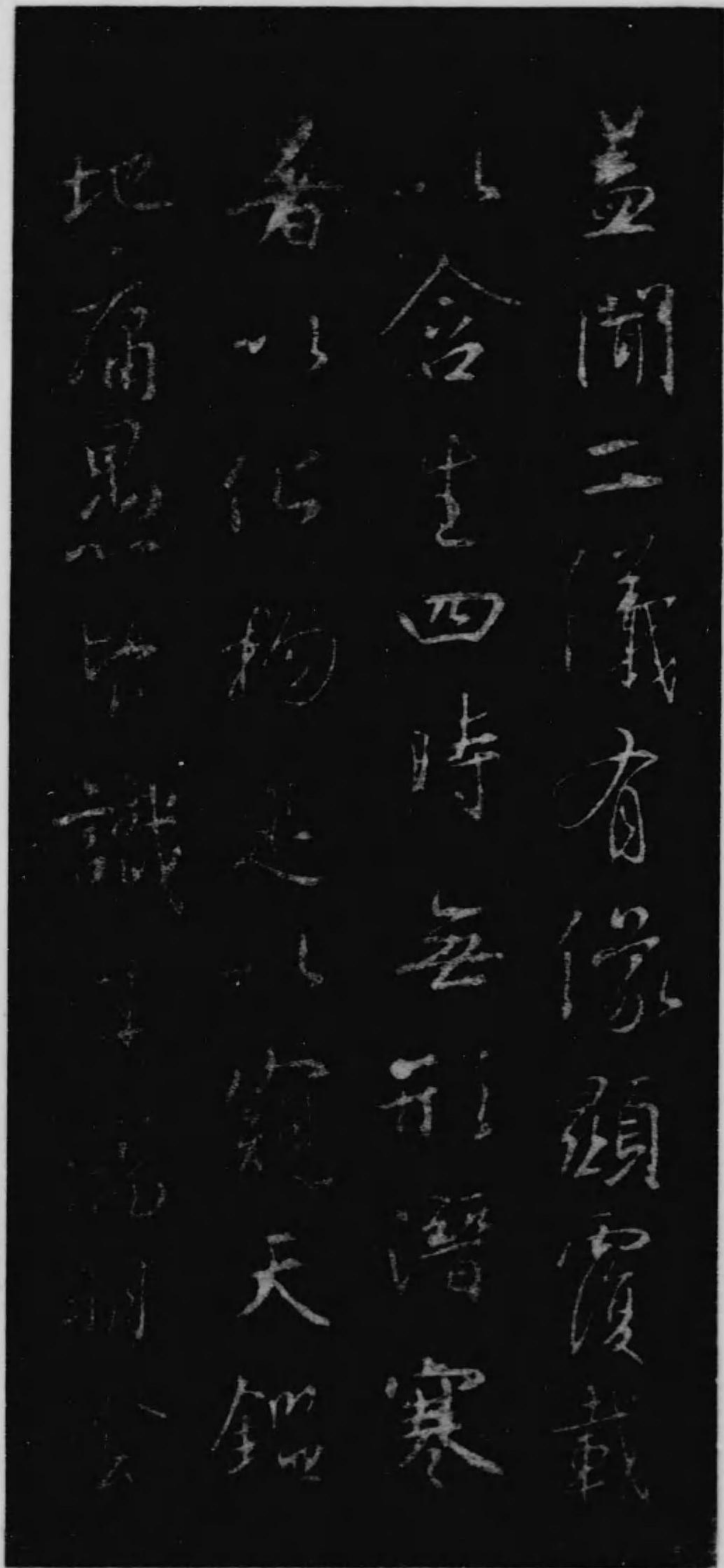
度は文字の組立法を學ぶのである。次は所謂九宮格に移るので、九宮格とは、縦横六づつ、六六三十六個の、碁盤形に格を切つたもので、普通の字は、其の六格づつ、に字を書き、平たい字は、上下の一格を空地となし、長い字には、左右の一格を空地にする、そして上の點は何番目の格子に打ち、後の點は何番目の格子に打つ、此處は斯う跳ると云ふ風に、楷書の組立法を、ちやんと機械的に教へるので、所謂館閣體、即ち試験の答案を書くに用ふる所の、極りの宜い、奇麗な文字を書くには、此の法を用ひることが便利である、併し随分時間も懸るから、餘程吞氣にやる積りでないと、此の方法を用ふることは出来ない。

斯くて其の次には、腕力を慣らす爲めに、瓦のやうな粗造な、水を吸ひ易いものに、水を以て頻りに字を書かせ、これは瓦に吸ひ附かんとする筆を運んで往く所の、運筆の練習であるが、更に一步を進めて、今度は非常に濃厚なる墨を以て、馬糞紙に似た、ぼや／＼した厚い唐紙に習はせる、これは瓦版よりも、一層運筆が六ヶ敷いから、それに慣るれば、如何なる場合に於ても、運筆の不自由を感じずる様なことなく、腕力自然に強くなつて來る。それを終つた所で、一通り手習ひが濟んだことになる。此の方法には、宜い所もあるが、また非常な弊害もある、第一「一」の字を書くとした所で、必らずしも、前の圖に示した如く筆を運ばねばならぬと極つたものではない、此

の方法に依る時は、三の字を書くには、三遍此の面倒な方法を繰返さなくてはならぬことになり、如何にも面倒なこと、古人が字を書くに、悉く此の方法を用ひたとは思はれず、これは全く唐以後、科擧の制度に基く、試験文字の必要から起つたものたることは、今更ら云ふ迄もないことである。それであるから、此の方法に依つて、腕を固めて仕舞ふと、其れ以外の文字は書けないこととなるから、これを日本人に應用するには、是等の利害の點を考へて、然る後に施すことが必要であらう。

(考)

梁同書曰く、葦間先生は、臨帖毎に佳能が多い、全く自家の性情を以て、古人の神理に合し、似ずして似て居る



王羲之聖教序 (晋)

所が、妙たる所以である。

(考)

梁同書曰く、前年秋、袁簡齋先生が、湖上に來つた時、山谷の書李青蓮の詩の不全卷紙本を見るとを得た、無落款で、懷素體を作り、間々一二筆の本色を露はす所あり、後に元明人の數跋があつて、其の來歴を記すると甚だ詳かであつた、山谷が懷素の書體に長ずるとは、但だ其説を聞くのみで、未だ嘗て見たとはなかつたが、此卷は精妙にして、不可思議に至て居るので、借りて案上に留むると半月、捨て去るに忍びなかつた。そこで始めて凡刻山谷の諸帖は、字皆な其の至れるものにあらず。凡帖の刻する所の懷素は、滿紙惡習、始終是れ酸餡の氣で、士人

の本領にあらざることを知つた、其の巻は、有力者の爲めに、五百金を以て、購ひ去られ、何處に往つたか分らない、因て思ふに、此等の字は、必らず墨迹が、一たび石に上つた爲めに、便ち神氣を失ふ故に、石刻中には多く傳つて居ないのであらう、或は當日の懷素も、亦た是の如く悪しきには至らなかつたのが、刻に因て悪しきを加へたのかも知れない。

二十二 進で其の所以を學べ

問て曰く、書道を専門として、其の蘊奥を極めんとするには、素より尋常一様の努力にては、こゝに到達することは出来ないと思はるゝが、研究の方法として、最も大切な事柄を、一言に概括して言はゞ、如何なるものなら

古人の學びたる所以を學べ

んか。

書に上達せんと欲せば、古人の糟粕を學ばずして、古人の學びたる所以を學ばねばならぬ。

名家の碑帖も、活かして見れば、生きた文字であるが、殺して見れば、一個の糟粕たるに過ぎない、そこで益々進んで、奥義を研究しようとするならば、唯だ形似の上のみ注意しないで、更に進んで、古人は如何なる方法に由て、勉強したものであらうかを、深く研究し、其の古人の研究した方法に基いて、自ら研究することが非常に大切である、其の實例の一として、鳴鶴翁が、貫名菘翁に就て研究された、趣味ある左の話がある。

「貫名の書を學ぶ秘訣は、どうであつたかと云ふと、此の

貫名の書を學ぶ秘訣

事に就ては、余も嘗て大に苦心したことがある。余は二十五歳位ゐの頃郷里から京都へ出た、其の頃貫名は、存命であつたが、慚かしいことには、此方の眼がまだ卑くかつたから、眼前に大家先生の書が目に入らず、却て此の如き、きたない反古紙の様な文字に、人が潤筆を出すのは實に可笑しいことであると思つて居たから、貫名の門を敲いて書法を問ふと云ふやうなことは、念頭に浮ばなかつた、其の後兩三年を過ぎて、我眼も幾分か進み、先生の書法の妙も、稍分つたので、就いて書法を問はんとした頃には、既に故人の籍に入られたと申す次第で、遺憾に堪へず、其の書法を聞かうとするには、其の門人に聞くより外に道はない、そこで先づ貫名の門人であつ

たと云ふ人々を搜し出して、其の人々を訪ね、先生が門人に對しての教授法、即ち執筆用筆結字等の法を始め、其の他種々のとを問ひ試みたが、是等の人々の言ふ所が、皆違つて居て、何れが本當であるか、殆ど判断に苦しんだ、是に於て自分の考へるには、其の人毎に異なつて居るのは、其の人々の性に隨て授けし所、其の人毎に同じきものは、定法として何人にも授けしものなれば、何の説か二人以上一致して居る書法があつたならば、それを以て信ずべきものとする外はないと、かう極めて、更に幾人かの門人を訪うて見たが、何うも二人と一致した説を聞くことが出来ぬ、これでは貫名の書法は、到底聞き得られぬものと、一時は失望した。

然るに京都の醫者に、越智仙心と云ふ人があつて、此の人は書を善くし、貫名に學んだことのある人と聞いたので、それを訪ねて聞くと、始めて貫名の、書を學ぶべき秘訣とも云ふべきものを知ることが出来た云々(書道及書道)以上は翁の直話であるが、其の秘訣と云ふのは、碑版を學ぶべきこと、我邦古代の眞蹟を見て、碑版と比較研究すること、及びそれに就て用筆法を悟ること等であるが、其の事は別に詳説してあるから、此には記さない。嘗にそれのみならず、翁自らが、執筆に當て、如何に苦心されるかは、翁の一代の事業とも云ふべき大久保公神道碑を書かれた時の有様にて、遺憾なく推察することが出来る、是れ亦た其の直話を記載したものを、左に轉載し

よう。

明治四十一年に、『大久保公神道碑』を奉書すべき勅命を拜した、文章は故文學博士重野安釋(成齋)が、既に明治十五年に脱稿して、十七年に勅裁を経たもので、約三千餘字の大作である。

支那にては、神道碑は、勅命に據りて、宰相大臣、其の他偉勳を建てし人、或は又忠烈節義の士に賜はりしとは、歴朝其の例尠ならず、又唐宋名家の文集には澤山ある、然れども、我邦に在て、勅命の神道碑と云ふものは、實に今回のを以て始めとす。固より從來勝手氣儘に諸侯が神道碑と稱して、建設しあるものもあるけれども、是れは破格のもので、論ずるに足らないことである。

碑の書體は如何にすべきか

此の如き大命を拜したる以上は、之を如何にせば、自己の責任を全くし得らるゝか、到底十分満足なるものは出来難しとしても、大なる過誤なく、笑ひを後世に貽さざることだけは、如何にしても、注意し且つ及ぶだけの精力を集注せねばならぬ。

而して先づ第一に、決せざるべからざるとは、此の碑の書體は、如何にせば、大久保公其の人と相對照し得らるかと云ふに在る、例せば唐にも、李北海や、其の他家の書きし神道碑がある、而して後世中唐より晚唐、乃至宋元に至り、某の神道碑は、唐の某の神道碑に據りしものとか、其の典型は、儼然として存在して居る、之を文章に譬へば、韓退之の「後二十九日復上宰相書」は、則ち

類有衣冠也擇切
割不能自勝去去
以少少を増威

孟子の莊暴見孟子の章(梁惠王下)より來り、應科目時與人書は、則ち莊子の庖丁爲文惠君解牛の章より結構法を學び、送孟東野序は、則ち考工記より出で、賴山陽また之を學びて、笑社記を作り、重野成齋の霞關臨幸記は、明宋景濂の閔江樓記を學び、而して閔江樓記は、則ち宋の王元之が、待漏院記より出でたるが如く、夫れ夫れ粉本のあるものである。現に東坡の石鼓の歌などは、韓退之の石鼓歌に擬したやうなもので、必らずや據り所なくてはならぬ。

然し英雄の碑は、英雄に照應するが如く、風發卓厲に、豪傑の碑は、豪傑に照應する如く、深沈重厚に、美人の碑は、美人に相應する如く、媚嫵艷麗に書くを以て、自

然の法則としてある。試みに何夫人の碑とか云ふものを見るに、決して飄逸奇抜の文字で書いてない、是れ一種の照應にして、文章字様に依りて、其の人を聯想し得らるゝに由る、即ち俗に所謂鈞合なり、恰好なりである。是に於て、自分は以爲へらく、公が朝廷の上に立ちて、百官を睥睨せられし時は、威風凜々として、衙中緊肅悚動して、誰も敢て仰ぎ視る者なく、即ち此の威嚴のある所を心に移して、寫さんか、いや／＼待て／＼、公は圍棋は餘り得手でなかつたが、自分と互角なりし爲め、屢々招かれて、棋の相手を爲したり、此の時は如何に厳格な公も、打解けて一目二目の劫を争ふ時、偶々笑顔して、和氣霽然たる所もあつた、然らば此の平和温厚なる模様

を寫さんか、いや／＼待て／＼と、或は和漢と云はず、古碑帳を繕きては畢り、畢りては又繕きしが、是ぞと云うて模範と爲すに足るものがない故に、未だ心に安んずることを得なかつた、さうして居る内に、歲月は立つので、結局が最初の考へ通り、公が儼然として、朝廷の上に立ち、有司百官を戒飭せらるゝが如き、風采を我心に移して書くことに決定した、是で書體の方は一段落が付いたと云つてよい。是より更に進んで、文字の選定である、何分三千字の大文章で、加之缺字の場所は、約二百八十箇所に亘る、殊に公が廟堂の上に在りて、施設せられし事蹟なのであるが故に、自然同じ文字が多い、誰も知る如く、金石文に

は、同様な文字があれば、書方並に畫を更めて、重複を避くるのが、不文律の規定である、依て先づ同様な字は、悉く拔萃して、各法帖に照合し、又字典、玉篇あらゆる字書と校合して、一々其の出處を附記したものをこしらへ、約十枚以上に及んだが、此の草稿と共に、宮内省の神道碑掛の委員の閱覽を求むると共に、能ふべくんば、御内覽を経んことを請うた、若し夫れ此の草稿に、一點の過誤にてもあらば、隨て本書にも過誤を生ずる次第であるから、慎重の上にも、慎重の手續を取つたのである。委員には博學の細川潤次郎、杉孫七郎子、股野琢氏、小牧昌業氏などあり、年齢と云ひ、又學問と云ひ、孰れも屈指の人々なれば、缺點があれば、必ず指摘せらるゝな

んと心竊かに楽しんで待つて居つたが、自分が文字の出處明細書の様なものを製して、此の字は俗字なれど、彼の神道碑に用ゐてある、是は全く重複を避くる爲めなり、或は此の字は、略字なれども、某碑文に在り、此の字體は、稍や行書に近けれども、某碑文に在りなど、精細に記せし爲め、委員諸氏も、點檢に勞する所なかりしとて、却て其の用意の周到を賞せられ、隨て御内覽をも賜はりしやに、仄かに拜承せり、此の故に第二の文字と、排列とは、是に於て一段落を告げたのであるが、扱て何れの地に避けて、之を書かんか、問題である。兎に角奉勅の神道碑なれば、則ち齋戒沐浴の禮を爲すは、當然である、又自分一己人の私情より云ふも、多年恩顧

を蒙りし大久保公に對する一片の報恩の義もあるから、及ぶだけの精力は集注したいと思ひ、斷然加賀の山中温泉に赴き、大倉屋の別荘を、全部借り受け、毎朝沐浴の禮を爲し、漸く半歳ばかりの間に、書き終つた次第である。

大久保公の面貌を想うては、油斷なしには書きたれども、何分にも大碑であることなれば、則ち固より間然する所なしとまでは、逆も及ばぬが、但だ甚だしき誤りもないと云ふことが、心の愉快を感じらるゝ次第である、大體から云へば、餘りに莊嚴硬直に過ぐる嫌は免かれざれども、前に申述べし如く、大久保公が、緊肅せる風采威容を、髣髴として眼前に見るが如く、之を心に移し、筆に

露はしたるものなれば、已むを得ぬ次第であるから、其の面白味のないと言ふことは、固よりである。

元來昔時なれば、其の肉書は、直ちに石に彫付けるとか、銅に鑄るとかで、原書を失ふのであるが、文明の進歩せる技術の力により、自分が肉書は、寫眞に撮影せられし爲め、原書は完全に存在せし故に、更に宮内省に請うて、御下賜を受け、永世保存する積りで、日夕坐右を離さない、此の碑本は、前年西東書房の請ひに應じて、印行せしめた。

序に話すが、重野成齋翁は、随分融通のつく人なりしが、此の碑文のみに就ては、實に剛情であつて、一時委員諸氏も、困り果てた、それはどう云ふことかと云ふに、成

齋翁が此の碑文を草せられし、明治十五年には、大久保公は、贈正二位である、それが明治三十四年に、一級を進められ、贈従一位と爲られた、故に碑表に、従一位と記せば、則ち翁の文章の完成せし十七年とは、年代が齟齬する、是に於て其の十七年の年月のみを改めて、三十四年以後にせられんことを求めしに、翁は怫然として曰く、彼の文章は、我國當時の状態に就て、立案し、感想を述べしものなり、其の後清國と戦ひ、又露國と戦ひ、共に大捷を得て、國勢一變せり、若し夫れ今日に在てならば、又今日の状態に就て立案し、感慨を述べざる可らずである、明治十七年に勅裁を経たるものなれば、其の儘にして可なりと、頑として、應ぜられない、之には委

九月十七日、義之報、
孔侍中、信書、志必不
有、領軍、疾、後、
下、皇、慈、不、能、
故、旨、達、取、消、息、

員諸氏も、理の當然に服して、反省を求めるとは出来ぬ、さりとて成齋翁の文章の年月にして、正二位と勅せば、則ち天恩の優渥を、拜承せざる次第とも爲り、實に如何ともすべからざることであつたが、さすがに杉子は多智の人として、成齋翁の作文の年月を書せざることにして、乃ち明治四十三年九月建と云ふことに落着せしめては如何との事により、自分は委員の特使として、成齋翁の宅に赴き、其の事を述べしに、それは委員諸君の勝手にせられることなれば、余は黙して止まんと、漸く承諾を與へられしなり、蓋し學者の本領は、守る所が固からざれば、實にいぬ、所謂自から侮つて、而して後ち人これを侮るとは、古人眞に我を欺かずで、自分は深く成齋

翁が、飽く迄も其の本領を枉げざる事に就て、感服するのみである。(書道及び畫道)

二十二 性情流露と一家の書風

問て曰く、「大凡書家 各々一種常用の伎倆あり、常に用ふれば多く見はれ、多く見はるれば傳へ易し、山谷は是れ山谷の字、松雪は是れ松雪の字なり、豈に名家にして未だ變化せざる者あらざるを知らんや」と、然れども自家の常用、誤て其習癖を長ずるに至らば、極めて不可なるべし、眞に長ずべきの伎倆と、宜しく除く可き習癖とは、何に因て之を區別し、將た何に宜で之を消長せしむべきか。

一定の法を勉めて久しきに互る

書を學ぶに定法あり、人の性情は同じからず、一定の法を

名家の書にて變化せざるもなし

努めて、久しく歳月を積まば、各自の性情、自然に筆墨の間に流露して、遂に一家を成すべし。

書を學ぶの定法とは、本書卷頭第一に於ける、「學書三要」を始め、以下説く所の、各種の書法を指すので、是何人と雖も随つて勉めなくてはならぬことである、併しながら、是等の書法は、從來傳へられたもの、如く、法則に據て、人を縛るものではない、前にも謂つてある通り、人の性情は、宛も其の面の如くに異ふのであるから、誰も彼も、同じ法則で縛つて、同じ形ちの字を書かせると云ふが如き、自然に反した方法では、決して技術の上達するものでない、それ故に、一定の法を勉めることは勉めるが、其の法たるや、畢竟自家の性情を以て、古人の

法則に據つて人を束縛すべからず

神理に合せしむるに在るのであるから、其の方法に随つて、久しく歳月を積むならば、自ら各自の性情を流露して、立派に一家の書を成すに至るのである、これは精熟の結果、此に至るので、奇を求め、異を衒はんとする如きものゝ、到底達し得る所でない、何人も大に心得べきことである。

書風が、自己の性情に伴うて變化する一例として、鳴鶴翁が、嘗て貫名菘翁に就て話されたことを、爰に引用して見たいと思ふ

「日本の書家としては、古い所は措き、近代では貫名海屋を第一等とせねばならぬ、随て貫名には、學ぶべき所が少なからざるやうに思はれる、孫過庭の『書譜』には、書は

人の一生を通じて見ると、初めは平正で、中頃は險絶、終りには又平正に歸すると云つて居るが、貫名の書は、之に反して、初めは平正であるが、終りには險絶と平正とが一緒になつたと云ふ風である、此に掲げてあるのは、(翁の客間に掲げてある所の、「與物爲春」の額を指し)貫名が八十三の時の書で、死ぬる年の三年前に書いたものであるが、其の以前のものに比して、殆んど別手に出たかと思はるゝ程に遒健である、此の一つの額を見ても、貫名の書が、晩年に至つて險絶となつたことが明かに看取せらるゝ譯である。

貫名が、菘翁と署したのは、七十以後である、畫の方には、七十以後にも、海屋或は海客と署したのものもあるや